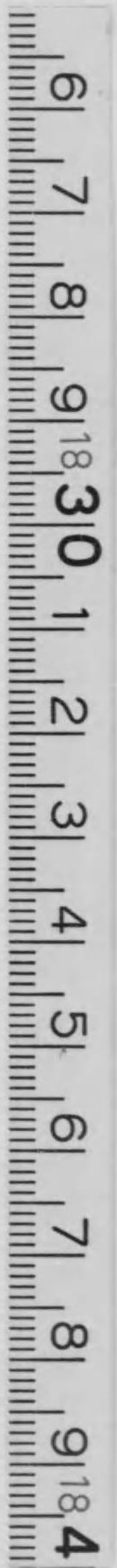


272
51



始



272-57

吉田勸治著



小笠原
教師の年記

発売元

東京 隆文館

大正
9.10.12
内交



東京新聞
小松千枝子の母書
若田忠治蔵

序

兒童の教育に於て何が大切であるといつても兒童そのものを知
るより大切なものはない。教授の方法も訓育の仕方も其他兒童
の教育に關する總ての事は皆兒童の知識を基調としなければなら
ぬ。然るに現時教法や教材の研究甚だ盛なるに拘らず、肝心の兒
童を中心とし基調とすることを忘れて徒らに技巧の末にはかり苦
心する趣あるは本末を誤るものといはねばならぬ。

近時兒童中心の説が唱へられ、又兒童研究の必要が叫ばれるに
至つたのは喜ぶべきである。が、所謂兒童研究や發生心理學は僅
かに局部的、斷片的の知識を與ふるに過ぎない。實際教育家は氣

長に兒童研究の進歩を待つてゐるわけに行かぬ。そこで自ら兒童に接觸し、自ら觀察して兒童を知る外はない。十數萬の小學教師は何れも皆數十數百の兒童に接觸して居るのであるが、兒童の性能を觀察し看取することは容易でないから、能く兒童を解するものは極めて少ないかと思ふ。教育上遺憾の極みである。

本書は吉田君の眼に映じたる兒童を描寫したものである。私は一讀して君の觀察力の鋭敏にして緻密なるに感じ兒童を知る上に於て學者の兒童研究よりも遙かに勝るあるを覺えた。讀み行くと兒童の性能特質が、否各々特色を具へた活きた兒童が、ありくと目の前に現はれる感がある。實際教育家は之を讀んで兒童の知識を得るは勿論、自ら兒童を觀察する幾多の手掛りと暗示を得

るこそ少くないと信ずる。兒童中心主義を力説し、之に基いて老齡小學校を經營し、之を以て小學教育を改造せんと努めつゝある私は、本書を我が教育者に推奨せんとするものである。

大正九年四月

澤 柳 政 太 郎

巻の始めに

此の記録は非常に貧しいものだ。然し子供を中心にして動いて来た自分の心が出てゐると思ふ。それが讀者に何かを與へる事が出来れば幸である。此の書に依つて、子供の事を本當に考へて呉れる善い友を得る事が出来れば喜びである。書かれてある事はつまらない事でも、それを讀んで下さる方々がそれ以上の物を各自の心に喚起して下さる事を望んで止ままい。

此の記録は短日の中に整理したものだ。日記帳に在るもので、他の人に譯の解らないものは書き換へて、誰にも解る様にしたつもりだ。が書き足りない所が随分ある。後で讀んで見てあんまり子供じみた事を書いてゐる所に氣がつかないでもなかつたが、然しその時

々の氣持ちには正直に書いて來たつもりだからそのままに入れて置いた。

この記録を發表するのが恥さらしの様にも思へるが、自分の生活をありのままにさらけ出すのも無意味では無からうと思つて發表する事にした。これを読んで下さる方は教師の心といふものに或點迄觸れられる事が出来ると思ふ。

自分は一教師として教育界といふグループの中に居て人の持つ色々な心に觸れて來た。相捉へ切つた、教育者の心に觸れすぎる程觸れてそして限りない淋しさに襲はれたり、純粹に近い子供の心に依つて勇氣づけられたりして來た。今頃こんな事を云ふ必要も無い事ではあるが、子供はまだ救はれては居ない。現在では子供の生活を眞に見てゐる者は教育者でなくて、寧ろ藝術家である様に思へてな

らない。子供の美しい所を生かす事は藝術家に依つて爲されてゐる。自分達は餘りに自己をだましてゐる。卑しい自己だけを後生大切に守つてゐる。従つて、直きに子供の生々しい所に觸れる事が出來ずに居る。

自分は少し云ひ過ぎたかも知れない。自分はこの様な事を云ふ資格の無い人間だといふ氣がしないでもない。が自分はいつかは必ず自分の内に燃えてゐる精神を生かす事が出來るといふ氣がしてゐる。今迄の事は今後の生活のスタートに過ぎない。従つてこの記録は自分の生活の指針に過ぎない。

自分は今わりに平和な幸福な氣持ちでこの過去の生活を見送り乍らこの記録を世に送り出す。



(供子るれかづむ) 筆トンラブンレ

大正九年二月

在
原
郡
玉
川
村
滿
願
寺
著
者



小學教師の手記

吉田助治 著



×月×日
自分じぶんは此頃このころ、「少女せうじよの憂鬱いうへつ」に就つて考かんがへさせられる。

これは教育けいよくに携たづはつてゐる誰たれでもが研究けんきうして見みなければならぬ問題もんだいに相あ違ちがひない。殊ことにそうした時期じきに在ある小供達こどもたちを受持うけもつてゐる人ひとにとつては直接ちやくせつの問題もんだいである。恐おそらく此この時期じきに在ある小供達こどもたちをうまく導みちびく事ことが出來できると否いな

小教師の手記

とは、その子のすつと後迄影響する事であらう。

その憂鬱となる時期、しきりに淋しさを感じる時期はその子供の發育状態及び境遇に依つて相違があるにしろ、十三、四頃からの様に思はれる。

かうした時期が如何なる原因に依つて起るか。それは非常に複雑な心理状態からなので決して簡単に斷定を下す事が出来ぬ事の様に思ふ。

自分はこれに對して研究して見やうと思ふだけで、しつかりした自信が無い。或は女であつたら、自分の経験から、容易にそれを知る事が出来る様にも思はれる。が又他からの方がよく嚴密に純客觀の位置に立つてそれを究める事が出来る様な氣もする。兎に角、自分は今自分の感じてゐる事を後の爲めに書いて置く事とする。

彼等がかうした時期にはいつてゐる事は、その子供達に接してゐて、絶えずその子供の内生活を見つめてゐる者には直ぐに解る。その徴候の一つ

としては綴方等に於て、盛んにセンチメンタルな材料を書きたがる。そして又それを割にうまく生かして行く。「淋しい」といふ言葉が彼等にとつて非常に親しいものとなる。そしてそれが又、あまり能くならなく極めて自然に表現される。あらゆる者に彼れは自分の生活を當て篋めてしまふ。あらゆる存在を淋しく現してしまふ。時にはそれが誇張になる事もある。然し彼れはそれを感じる事なしに書いてゐるのでは無い。誇張して書かすには居られない氣持ちとなつてゐるのだ。彼等はそうした事に依つて、自分の世界を作る事を楽しむ。

それから彼等は其頃になつて、必ず毎日毎時間、寸時も離れてゐる事が出来ぬ様な友人を探し出し、結び合ふ。それと同時に、他のグループの者を極力反撥し、避け、自分達の世界をくすされぬ様に、荒されぬ様にと神經過敏に擁護する。そしてごつちかど云ふと運動場の直中を走り廻る様な

事が無く、餘り人の來ない所を探して、そこでしんみりと楽しく遊ぶ事を喜ぶ。彼等の他を警戒するのは彼等の眼色に依つても知る事が出来る。

それから彼等の讀物——好んで讀む記事から察する事が出来る。一體女の子は始めから讀物の種類に對しての嗜好は男の子と違つてゐる。彼等は決して英雄譚の様なものをおまない。好まないといふ程で無いにして、近づかぬ様にする事は事實だ。そして憐れつばい物語を好む。

それが此時期のものには、殊に鮮明に區別が出来て終ふ。なるだけ哀れな物語を彼等は選んで讀む。それが又公然とでなく、人知れずこつそりと讀む様になつて来る。授業時間中或は遊戯中でも、時どするとその物語の事を考へ、幻を拵へ、空想で築きあげて、その作中の人物を考へてゐるのが、少し氣をつけて見れば解る。彼等は決して、その時間をぼんやりしてゐるのではない。一種のぼんやりであつても極めて種類の違ふぼんやりで、

或意味でのエクシタシイの状態に在るのだ。

又教師に對して附き纏ふ事が多くなる。或時は反抗でもしてゐる様に一切側へよらず、前に書いた様に反達同志で遊んでゐるが、どうした拍子にか附き纏ふて來ると容易に離れなくなる。そして彼等の言語、舉動から彼等を暖めて呉れる、つまり淋しい心をどうかしてくれ事を願ひ、又、その心のやり場として教師を選ぶ事がある。教師には露骨に彼等が淋しさを感じてゐるのだな、といふ事が判る。彼等は綿密に教師の心の動きを観察してゐる。

それから成績が少し思はしくなくなる。これは優等生にあつては判然わかるが、劣等生は容易に解らない。優等生の方にしろ、一概にはそう云へないとも思ふが、概して云ふとそうだ。數理的な方面でそれが殊にはつきりする。その代り感情は著しく働き、その方面の學課に對しては鋭敏に

なる。綴方の様な學課に於てはそれが著しく解る。

以上の位の事でもその子供が、その時期にはいつてゐるといふ事が、注意しさをすれば直ぐに解る。これは學校生活の上ではあるが、家庭に於てはなほ判然する事があると思ふ。

それは何れその中に研究して見たく思つてゐる。

扱てこの時期が如何なることの爲めに彼等に起るのであるか？それは簡單には斷言出來ぬ様な氣がする。深い研究の上でなければ。然し彼等の家庭の事情、それから發達の狀態から考へて、確かに「性の眼覺め」の臚氣な炬火である事は事實らしい。

彼等は自分ではそれを意識してゐないかも知れないが、生理的に來る一つの自然な過程であるのだ。或人は幼年時代から性の教育をする必要が在る事を唱へてゐる。彼等が自身意識してゐない中から、相當の導きを與へ

るといふ事は最もいゝ方法に相違ない。その時になつて慌てるのは、確かに當を得た方法ではない。

それに兎に角として、彼等は自然な經路を経て、此處に至る事は極めて明白な事なのだ。

性の眼覺の時期は、あらゆるものから突き離され、又あらゆるものに結びつく特殊な時期である。そして自然に、人に對して懐しさを生じる様になり淋しさを感ずる様になるのだ。又特に「人」といふ許りでなく、動物―犬や猫等に對しても、その可愛りかたが一層強くなる。つまりこの時期に於て、あらゆるものに生命を見出すのである。

この時期に至る迄の經路は決して皆一樣でない。生理的には殆んど同様でも、それが又内面の生活によつて非常に左右される。そして、かなり遅い者、割に早いものゝ差が出て來る。

例へ非常に順調に育ち、何等心的方面に強い刺戟も無く、のんびりと育つた者にしろ必ず一度は、例へ遅くとも此の時期を通過する。そうした場合は主として生理的方面からなのだが、若しかゝる時期を経ずに育つ者が何十人かに一人あつたなら、それを非常な異例なのだ。たまた非常に遅く迄かうした時期に至らぬものがあつたにしろ、それは後に急に爆發する事がある。自然に此の時期を通過して居るものよりも、いゝとは云へない。この時代に善く指導されてゐる者は幸福だ。家庭の關係等から主として所謂良家の子供なのだ―それがすつと年がいく迄知らずに居る者は、急轉して寧ろ悲惨とも云へる一つの性の慘劇になる事がある。

この注目すべき特殊な時期にはいる者は、極めて徐々なものがあり、又少し急な者がある。もとよりその時期が必然的に彼等に近いてはゐるのだが、突然に起つた事件から急進してしまふ事がある。

例へば密接な關係のある者の突然の死の場合、彼等は一足飛びに飛び込んで終ふ。

此に一人の少女がある。十三歳だ。此の子は家庭の或る情から、この時期にわりに早く到達しかけてゐた。そこへ母の死が來た。其少女は母の死を次の様に記録してゐる。

母の死 (原文のまゝ)

「行つて参ります。」母様の前にお辭儀をして私は顔を上げた。

絹の三枚布團の上に朝は御氣嫌よく坐つてゐらつしやつた。

「早くおいで。」母様はそう仰言つて私の顔を見つめた。

私は母様と言葉を交はすのもこれきりとはゆめにも知らず、今朝は大そう御きげんよくいらつしやると思つて學校へ行つた。授業中もいつになく心安く思はれて、母様の御きげんよく笑つてゐらつしやるお顔を頭にうか

べたりしながら、新しく出来たばかりのまはりぶらんどで、六年の人等と遊んでゐた。ふと憲五郎(奉公してゐる人)が急いで門をはいつてくるのが見えた。私ははつと思つて身ぶるひした。

「どうしたの。」私が云つたのには返事もせずに「早く〜」と云つて私のかばんを持つた。私はむ中でかけ出した。私にはもう何もかもわかつたのだつた。

ふだん十五分もかゝらない學校から家庭の道のりをすいぶん遠いと思ひながら、憲五郎の事などはかまはずはせた。

やうやく家に入ると、袴もぬがす、母様のそばへ行くと、親類の人達も皆集つてゐた。が只石鳥谷の姉様だけがまだお見えにならない。皆んなの顔はなんとなく不安におそはれてゐた。お醫者様もゐた。注射も幾本かしたらしい。氷嚢も幾つもした。それでも、母様は目をあかなかつた。すや

〜と眠つたか、死んだかわからない様なかすかな息をすふてゐられる。今朝迄あんなに御きげんのかつた母様はもうこんなである。思へば人の命の位解らないものはない。皆の顔には母の命のうすれて行く事を氣づか

はしげに見て居るのがあり〜と見えた。
夕方になつた。けれどもまた石鳥谷の姉様がお見えにならない。「もう来る時間なんだが」そう思つてゐる中にも、姉様の來るのが待ち遠しい。待つてゐる時間は中々長いものだつた。

やうやく姉様がおいでになつた。父様と御あいさつするにも何となくそは〜して、目にはもう涙さへやどつてゐる。けれどもまだお母様の息の通つてゐるのを見た時、何と思つたかそのまゝそこにうつぶしてしまつた。お醫者様が來て又注射をして行つた。それからだん〜息づかひがよくなつて、皆も安心した様だつたが、どうしても、もうこれきりと云ふ事が皆

の頭の中にはついてゐた。母様の息はだん／＼に静かに、あたりまへにすふ様になつた。「この様ならば、小さい人達は寝てもよい、」とお医者様がおつしやつた。私等は別の室に入つた。「母が今……」と思ふと、どうして眠れやう。起きてゐれば又眼が悪くなると云つてしかられるし、と思つて、起されたらすぐ起きるによいやうに着物をきて床の中にはいつた。

床の中にはいるとやつぱり眠かつた。

「悪くなつたらすぐ起すから」といふのを聞いて、様々な事を考へながらねむつてしまつた。母様の工合がよかつたのか、私達は朝まで起こされなかつた。

朝になつて母様のそばへ行つて見ると、息づかひは益々よくなつてゐた。「この様ならば」と私等は學校に行つた。始めの時間に先生に話したら授業をしなくてもいゝとおつしやつたので家に歸つた。その時は母様の工

合がいたので、親類の人も歸り、家の人も大てい横になつてゐた。たゞ油町の母様だけが、ついてゐた。私はゑんがはで小さな人等と遊んでゐた。「うん」といふ妙なうなり聲がした。私はおどろいて行つて見ると油町の母様が「早く」と云つた。私は吃驚して何を考へるでも「早く」といふのを聞いてお父様や姉様の横になつてゐる室に行つて「お父様早く。」と云つたなり、はせて来て母様の枕元にすはつた。ふだんはおちついて居るお父様も、こんな時にはあはてるものだつた。帯を持つたまゝとんで来た。油町の母様がそばにあつたちやわんの水を顔にふきかけた。と又「うーん」といつて息をふき返した。となんだかのどにひつかゝつて居ると見ると息をすふ度にぐく／＼となつて、とても見て居られなかつた。こんな事を母様が知つてゐらつしやるだらうか。もし知つてゐらつしやつたら……。

皆はたゞだまつて母様の御顔を見つめてゐる許りでどうする事も出来な

かつた。こんなになつてはもう薬も何もわからなかつた。今か／＼と思ふ度にはら／＼した。

時は丁度十時三十五分—あゝ母様はやすらかに絹のふとんにくるまつて思ひ残す事もなかつたか、それとも又どうした事か二度目もあかれず、もちろんなにもおつしやらずに、二度と此の世の人ではなくなつた。とめやうとする泪はひとりではら／＼と落ちた。

あゝ母様はさう／＼……思へばまるでゆめのやうだ。家の中はだん／＼暗く、せき一つする人もない。たゞなきじやくる音だけがかすかに聞える。皆の身體はたゞ／＼暗い所へひつばられて行く。その時お庭の櫻がちやうど今を盛りと咲いてゐた。おとなりのうぐひすのなく聲もさびしく雀のなく位にか思へなかつた。

今でもあの時の事を幾度も思ひ出すが、母様がおいでにならなくても、

どうしても此の世の中に生きてゐるとしか思はれない。現にその時自分の眼で見えてゐながら。

此の綴方は一見、そうした時期の子供が作つたものゝ様に見えない。表面的に目立つ事は何一つ書かれてゐない。母の死にあつたものが誰でも感じる一通りの事を書いてゐるに過ぎない。若し少し違つた所があるとすればこの年輩には珍らしい観察を時々ひらめかしてゐると云ふ事だけだ。と思ふかも知れない。然しこの少女の心をちつと見つめると、殊にその子供をよく知つてゐる自分にはこの時期で無ければ書かれない事がその中に包まれてゐるのである。

この綴方には書き足りない所も無数に在る。又わざと避けた所もある。一見落ちつき切つてゐる様に見える處にも、仔細に見れば至る所に心の動揺がある。そして憂鬱期の背景がある。

この文が一見してそうした時期にある子供が書いた文でないと思ふのは表現のしかたであるが、同時に又此表現の上に於て、その子の持つ非常に強い性格を感じる筈だ。この子がセンチメンタルな感情に走らずに、まず事の出来たのは、一に性格の方だ。この文を読む人は、この子が感情を理性を持って押し潰してゐるのを感じる。そして意識してやつてゐる事もわかる。

この子が平常の生活は、前に擧げた徴候によつて判断して明らかに、その時期にある子供なのだ。然しこの子はいざといふ時、人の前に弱々しい感情を出す事を恥ぢてゐる子だ。男以上の意地を持つてゐる。

この文がまとまりがついてゐない所が随分に多い。それは、理性が感情を押し潰した跡だ。この観察を持つ子が、所々にまとまりのつかぬ事を書き散してゐるのを見ても、それがわかる。

この文は母の死後一週間後に書かれたと思ふ。随つて或距離を持つて冷静に眺める事が出来た。「ふだんおちついてゐるお父さんも、こんな時はあはてるものだった。」といふあたり、又後の方の櫻の花の事を書いたあたりにそれが出てゐる。

然し後の方の櫻を書いた所が、實は落付きを感じる筈なのだが、少し氣をつけると、それが彼等の一時期の氣持ちである事がわかる。文そのものから解釋するよりも、こゝへこの事實を持つて来た氣持ちではつきりわかる。なほかうした種類の事が、句讀點の打ち方でも多少わかるが、自分が寫す時自分勝手にしてしまつたので寫したのではわからない。

性格の弱い者の文だと露骨にそれが判るのだが、かうした性格の所有者は容易に解らない様にしてゐるのだが、その方が却つて自分には興味がある。

この時期は自分で統御して行かうとしてゐる、かうした子供を見ると、却つて可憐に思へる。この種類の子供は實に珍らしい。この文の表面の上でも少しはこの時期の變態に數へられるべきものだ。

母の死、父の死、兄弟姉妹の死がその子供がこの時期にはいるのを促進するのは事實だ、それは決して大人の感じる様な徹底した悲觀ではない。

この世の痛切な呪では無い。獨特の頼りない淋しさなのだ。

その他自分の病氣が手傳ふ事も少くはない。それから他人の家に育つ者―それにも種類があつて好遇され、逆遇されるものがあるがごつちかご云へば逆遇されてる者の方が早いがそうと許りは云へない。茲に一寸一吋解釋に苦しむのは藝妓屋に育てられた子供等が、一寸どう解釋していか解らない事がある。決して淋しそうには見えないし、又云ひもしない。たゞ踊つたり騒いだりしてゐる。彼等は或はこの時期を何の苦もなく、一足飛

びに飛び超してしまつて居るでは無いかとも思ふ。彼等の周囲の關係から或は多少感じてゐてもごまかしてゐるのかとも思ふ。又ごまかされてゐるのかも知れないが。兎に角ある種類の子供の事ははつきり解らない。

又考へさせられるのは、非常に苦しめられ、虐待されて育つた子供の持つ淋しさで本當にこの時期に相當するかどうかに疑を持つ。彼等は恐らく淋しさといふよりは苦しさであり、恐怖であり、呪では無いかと思ふ何しろ自然なものではない。

少しは急なものであつても、その經路を経て來た者でなければこの時期にゐる者として云ふ事が出来ない。普通といふ程度で育つたものを自然に此の時期にはいつた者と見るものだ。小供のくせに生活上のため妙に性的に見えたりする子供がよくある。小さいから不遇で、召使―これもあまり全般とは云へないが、低い階級を主として云ふ。―などにやられ、男と始

終話し合つたり騒ぎ廻つたりしてゐる子供等は、さういふ感じがする。それから先の藝妓屋に育つた子供もこの部類にはいるのが當然だらう。かうした性に眼覚めかけてゐるほのかな動搖を通り越した感じのする者があるが、それはやつぱり此の時期の淋しさとは少し縁が遠い。自分でも本當に意識せず、ふらくしてゐて人知れずの惱みを持つてゐるものでなければ此の部類には入れ難い。

扱てなほ別に二三の例を書く事にする。今度は少し露骨に判るものにする。

十五夜の月（尋六女）

月は眞東に出た。今迄にらめつくらをしてゐたが、通りの太鼓の音におどろかされて外へ出た。

「茂ちゃんいゝ月だね。」と知ちゃんが云つた。

「いゝ月ね。」いゝ月にきまつてゐるわ。今夜は十五夜ですもの。」「あゝそう／＼十五夜ね。ちつとも知らなかつたわ。」「どうりで今夜は毎晩上る月より大きくまつ黄色だと思つた。」「あゝそう／＼さつきの音がもう聞えなくなちやつたぢやないの。」「私が云ふと、」「それだつて茂ちゃんぞ知ちゃんが月の事ばかり話してゐたんですもの。行つちやうにきまつてゐるわ。」「おきよさんがそう云つて怒つた。又横から「本たうにつまらないのね。おきよちゃん。」「年子さんがおきよさんに加勢してそう云つた。

「そんなら又後できつと来るから内へ行かう。」「おきよちゃん達が、知ちゃんのことについて行かうとする時私は「ごめんなさい。私にがわるかつたんだから。」「そう云ひながら後について駆け出した。

教會の臺所をはいるとおばさんが私たちに「もうおそくなるから、おふろへおはいんなさい。」「と云つた。みんなは元氣のある聲で、「はい」と返事

をした。

おきよちゃんたちや私たちはすぐかみをまるめて湯にはいった。

「いゝお湯ね。」

「どうして今日はこんないゝお湯なんでせう。」

ふる番さんのさいとうさんが戸をあけてはいつて来た。

「今日は十五夜でもあるし、又皆んながはいるのだから、とくべつにわかしてやつたんだ。」と云つた。

みんな話をしながらお湯を出た。あんまり暑いので腰まきだけして月の見える所に出た。

「お、いゝ月だこと、みんな来てごらんさい。」と私はしらすにさげんだ。みんなが廊下をばたくくさせて来た。

「本當にいゝ月だね。十五夜は今日切りだよ。」

「ほんとにこんな美しい光をどこまでも世界中はつしやしてゐるのも今日きりね。また來年ぢやなければこないのね。」

こんな事を話してゐると、なんだかつまらない様な氣がして來た。いつまで見てゐてもきりがないので、おしいやうな感じがしたけれども、かせをひくといけないので、きものを着て外へ出た。

此の文には露骨にこの時期の感じが出てゐる。綴方としても相當にまよまつてゐるのでその感じが一層目立つ。そして又考慮せずに露骨に書いて行つたので猶更はつきりしてゐる。が無暗にセンチメンタルに許りなつてしまはず、しんみりした味を出してゐる所にいゝ所がある。

先きに出したのは性格が性格であつたし、それに材料も材料であつた爲めに、その直接な氣持ちが、反撥し合つて心をちよこめる所もないでは無

かつた。随つて一層、この時期の心持ちがかくれてゐた。

然しこれは材料がかうしたもので、又かなりな距離なので、始終、或間隔を保つ事が出来たので、露骨に氣持ちが出てしまつたのだ。先きの或點迄離しておいて書いても、それがいつの間にか近づき過ぎたのだ。

この文では一體がそうした。氣持ちの上になつてゐる。わけても會話にはそれが明瞭に出て来る。

「本當につまらないわね、おきよちゃん。」といふあたり、それから作者の「私」が「ごめんなさい。わたしが悪かつたんだから。」と云つて後についでかけてゆくあたり、それから又、「本當にいゝ月だね。十五夜は今日きりだよ」が。實にそうだ。又、「こんなことを話してゐるとなにかつまらないやうな氣がする。」といふ所や、「いつ迄見て居てもきりがないので、惜しいやうな氣がしたけども」……云々の所など。

この文全體の上から少し詳しく觀察すれば作者はたえずつながらう／＼としてゐるのがわかる。それがふとした拍子に又つきはなされる。そして終りに行つて、とう／＼やつぱり淋しさの中に落ち込んでしまふ。

自分が悪かつたといつて詫びながら、後を追ひかけて行くのは、この時代のほのかな淋しさを持ち、半ば意識的に、つながる者を求めて居る少女の心だ。

作者は兎に角友人とは何不足なくつながり合つた。同様に友達お互も然しそれ以上のものが心に働らき出す。十五夜を今夜きりだよ。「で何か今迄満ちてゐた心を動かしはじめる。「本どにこんな美しい光を……云々」は理屈からいくと誤謬だ。だがそんな事は大目に見てこの感じはやつぱり直ぐ前から引きついである。

終りに作者はとう／＼突き放されてしまふ。「こんな事を話してゐるとな

んだかつまらないやうな氣がする。」がそれだ。それから又、何處かに安住の場所を求める様な氣持ちで、「いつまで見てゐてもきりが無いの……云々」となつてしまふ。

心の経過がはつきりしてゐる。たしかに此時期でなければ現れない一種の美しさだ。

こどもちゃんへ（尋六女）

こどもちゃん。さぞさびしいでせうね。おばあさんは兄さんの四十九日ですむと歸るはずですから十一月の初頃になるわ、いやでせうが雪ちやんをたのむとおばあさんが云つてゐてよ。綿入でもなんでもみんな前のおばさんが知つてゐるから、出してお貰ひなさいつて。

私達が住んでゐた所、今度どんな人が来て！。東京の人、田舎の人、ごつちおしへてちやうだいね。今島に何が植ゑてあるの。此の間送つて下さつ

たおいもね。随分おいしいわ。毎日お入つには大がいにそれよ。私又何だかあなたたちと海へはいりたい様な氣がするわ。おばあさんに云つたら、來年は學校がお休みになつたらいらつしやいつて。私ね、そう思ふと兄さんの事を思ひ出してかなしくなるわ。此の間お友達と遊んでゐて泣いちやつたの。それからみんなが、私にあふと、「兄さんのこと思ひ出すの、およしなさいね。」と云はれるから餘計に悲しくなるわ。田舎に居た時、姉さんとゆう便局へ行く道、姉さんが「兄さんは今度もうなほらないから、若しものここがあつたら、東京でみんなと仲よく暮しませうね。」と云はれた事を思ひ出して、夜なんか一人で泣いてゐる時があるわ。東京の家はにぎやかだと思ふでせうが、家ちやそんなにぎやかぢやないことよ。おばあさんだつて、ほんとは三十五日すまして歸るつもりだつたけれど、皆んながさびしいだらうつて、一日々々のばしてゐるのよ。もうちきだから待つて

わらつしやいよ。それぢあ、あんまり長くなるからこれでどめておくわ。

この時期は、時に自分の淋しさを享樂する人形から離れた心持ちは、或目下の對照を選んでそれを愛する事によつて幾分満足する。この文にはそれがよく出てゐる。ここちやんといふ目下の―たしかにそれに違ひないと思像する子供を選んで、自分の氣持ちを思ふ存分發表して満足する。そしてその心持ちは繊細に働らきかける。

「綿入れでもなんでもみんな前の云々」「東京の家はにぎやかだと思ふでせうが……云々」「おばあさんだつてほんとは三十五日をすまして……云々」所など、繊細に働きかける氣持ちが出てゐる。これも此の時期の少女の心の働らきの一つだ。

この文で作者は饒舌に、満足して話してゐる間にも、すきがあれば飛び

出そうと覗つてゐる、所謂淋しさがある。

「……私を思ふと兄さんの事を思ひ出してかなしくなるわ。」それから田舎にゐた姉さんとう便局へ行く道での會話。等の類だ。それが又極めて自然に織り込まれる。

この文を通じて姉さんぶつた饒舌がある事が一つの注目すべき事だ。假象に對して（この場合は假象とは云へないが）―働く心持ちは非常に繊細であり、又それに依つて満足するのだ。この年齢になると餘計に目下の女の子をかはいがる様になる事は事實だ。それが少し進むと友人同志が非常に親しくなる。それは尋常以上の親しさだ。他を警戒して迄自分達が満足合はうとする。

かうした事は決して女の子だけの事ではない。男にもある。然し男は女に比べて遙かに年齢が多くなつてからの事だ。中學時代に於てそうした事

がある。

男にしる、女にしる、かうした時期には極力他を反撥する。それが高調したものか時に同性戀愛となる。女の子供達の仲が非常に好くなつたのも、その萌芽だと云へる。往々女學校あたりでそれが著しく人の眼につく様になる。或は彼等は年下の者を求めてそれを愛す。或女學校ではその弊害の爲め、絶對に上級の者と下級の者とが仲よくする事を禁じてゐるといふ。

それは今自分が書いてゐる時期から數年先の事に屬する。兎に角彼等はお互に愛し合ふ事に非常な満足を感じる。或場合は二人がからみ合つて次第々々に暗い心持ちになつて行く事もある。慰め合ひ、力づけ合ふといふ事は別問題になつて、此時期にはお互からみ合ひ、抱き合つてしまふ。そして全然一體となる。従つてそこに悪い結果が生れ、あまりよくない結果が生ずる。

この作者の心持ちを靜かに考へて見る時、一種のそれに類した、目下のものを抱きこまうとする心が感じられる。同等の事を感じるもの同志でなくとも、高調して居れば生命の無い者に話しかけても満足する事もない。は無い。然しそれはこの時期ではない事は云ふ迄もない。

例をあげれば限りなくある。が今日はやめて置く。

かうした時期の子供が少しの所で全くのセンチメンタルになつてしまふ。綴方で一番わかるのだが今茲にそんなのがないから後にする。

この時期にゐる子供達を一體どう導いて行けばいゝか？ それは仲々六かしい事だ。自分にははつきりした事が云へない。兎に角最も大切な事はセンチメンタルにしてしまはない事だ。扱てそのセンチメンタルにせず導いて行くにはどうするか。教師の気持ちの問題だ。性格の弱い者がとも

するとかうした傾向に趨り易い。さればといつて性格の強すぎるのも彼の小供達には少し堅過ぎる。そして又男がいか。女がいか。一得一失がある。男だと、ともすればこの時期の心持ちを無視してしまう。そして女はセンチメンタルになり易い。そんならどつちがいか、どつちがいか悪いかは一搬に云へなくなつて来る。それがやつぱりこの時期の子供の心持ちに理解があり、繊細にその動き方を看守する人が一番いゝといふ事になる。

自身が一度経験してゐる事だから、女がその點ではいゝに違ひない。所が自分も一所になつてしまふ事が有り勝ちの事だ。性格の弱さからだ。一所に淋しむ事が出来る。然し力づけ慰める事が六かしい。男がそんならどるか。異性であるといふ事が、ともすると色々な點でひつかかりを生ずる。要するに理解そのものも多少に依つて定めるより他ない。この時期を無

視した結果を考へると、決して輕はずみに決定すべき事では無い。この少女時代の特殊な美と、それからこの特別な過程をよく知り且つそれをうまく生かす自信のあるものでなければ六かしい事だ。

この時期に於て叱るといふ事が如何なる響影を及ぼすかはよほど考へなければならぬ事だと思ふ。訓戒する程度の好意に満ちた言葉ならいゝ。然し罵る様な種類の事は謹まねばならぬ事だ。そこで彼等は益々センチメンタルになつて終ふ。

この時期に於てセンチメンタルになつた者は簡單に離れ得ない。そして恐ろしい事に、これが邪魔して色々な美しい尊い感情がわからなくなる事が多い。センチメンタルなるものは心の扉の直ぐ次位にゐる。出口だ。こゝにゐて邪魔されては、あらゆる物の本當の姿が見えなくなる。

そしてこの傾向の強い者は自分で自分を抑制する力が缺乏する。そこに

思はぬ悲劇も起る事がある。これを一種の性格破産とも云へぬ事も無い。淋しさも生かしやうではその人を落付きのあるしんみりした感じのする人にする。それが又六かしい氣がする。

何しろこの時期に對しての深い省察が非常に必要だ。自分はどうかして出来るだけ深く考へて此の時期をうまく生かして行きたいと思ふ。

×月×日

子供が如何に自分の世界を大切に、他からの侵入者を反撥するかは今更に驚く。

今日一時間目は、算術だった。自分は問題を出して置いて机間を巡視して、子供が懸命に鉛筆を動かしてゐるのを覗き込んで歩いた。

田村といふ自分が常にその子の前に足を止めずに居られない低能兒があ

る。

その子は一生懸命に鉛筆を動かしてゐた。然し彼には何の自信も無いらしく、極めてもぢ／＼しながらやつてゐた。他の子供が元氣でやつてゐる手前、自分だけ出来ないといふ事をきまり悪くでも思つてゐるかの様に。

自分は黙つて見つめてゐた。子供が書いて行つた後から一々それを確かめた。優等生の方ではもう手が上り始めた。がその子は相變じず暗中模索をやつてゐた。自分はふとその數字の計算の中、間違つてゐる一字を何も云はずに一寸軽く爪で傷をつけてやつた。所が田村は急いでその上を鉛筆でわたつて字を黒々と書きなほした。自分はそれを黙つて見てゐた。その字を狼狽へて書きなほす時の様子！自分は今更他の侵入者を無意識に反撥しやうとする子供の世界を感じずには居られなかつた。自分が傷をつけてやつたのは何も別に字が見えなくなる程では無かつた。許りでなく横から

見れば少し跡が光つて見えるだけで、正面から見ればその数字の上は何等の變化も起つてゐなかつたのだ。然し子供は急いでそれを書きなほして了つたのだ。

教師はこれを如何に考へるべきものであらうか。自分等が反省しなくてはならぬ所が、至る所に在る。

自分はその狼狽した行爲を見て遂苦笑して終つた。子供は少し経つて自分を見上げた。彼の眼には自身の行爲を始めて意識した時の驚きが現はれてゐた。

彼等から見れば教師は、恐ろしい浸入者である時があるのだ。誰が、自分が完全に子供のあらゆる瞬間を率ゐる事が出来るか云ひ得るだらうか。圖畫の時間に於ても、自分は時々かうして現象を見る。それは子供が夢中になつて楽しんで書いてゐる時よくある事だ。

子供が一生懸命になつて線をひき、その描く物の形を眺めては訂正し／＼してゐる時、教師が子供から鉛筆をとつてそれを訂正してやる時の子供の顔に如何なるものが現れるかを仔細に視る必要がある。

子供等が描いた「物」の輪廓、全然形を成さない線でも、子供が楽しみながら書いたものである。彼等が描く時、頭を動かしながら、本氣に書いてゐるあの美しい喜び。彼等が人に見せない様に、ともすればそれを袂を以て隠して了ふ事がある。それを大人は、恥しがつて、と解釋する。そして折角見て訂正してやらうと思ふのに隠したりするのは不心得だと思ふ。が子供が書いたものを隠すは、たゞ恥しきだけでは無い。自分の楽しみながら描いたもの、自分の世界に對しての浸入者を恐れるのだ。それが決して意識されてと許りは云へないが。

若し子供が折角書いた線を教師がゴムを以て消して、新しく書いてやつ

たとする。その時の子供の複雑な表情の中には、屈恥と、反撥する心が入り亂れてゐるのを見る。

又線を消さずに、その不完全な線の側に、別に薄く線を引いてやり、そのどつちが正しいかを眺めさせ、判断させてから子供に勝手に消させる方法をざるとすれば、ほんの僅かの相違に於ても、彼等の心には著しい相違がある事を自分は見ると。彼等は急激な無條件な浸入者に對しては飽く迄も反撥するが、彼等に或ゆとりを與へて緩に、柔かに這入つて行けば、彼等はそれを甘んじる。許りでなく歓迎しさへもするのだ。

子供は強制的な者の前には常に反感を感じる。

自分達は飽く迄も子供の世界を踏み躪じらぬ様に注意しなければならぬ。それは子供を増長させ氣儘にする事にはならない。子供の世界に充分に理解があり、愛のある者の手で無ければ子供は正しく育たない。が何と

自分が子供の世界を踏みにちる事が多い事か。飽く迄も反省しなければならぬ。

自分は理想的に近い子供の育て方をしてゐる家庭を知つてゐる。

それは藤村といふ自分の組の級長の家庭だ。自分は常に藤村の落ち付いた、判断力のある事には敬服してゐるのだ。生徒だと言に云つて終ふには彼はあまり善良な模範的過ぎる子供である。

或日その家庭を訪ねた。

『私の家では子供に干渉しない主義なので。』と主人が温顔に笑ひを浮べて話し出した大體は次の様な事だ。

『私は子供等にはがみく／＼云はぬ様にしてゐます。なるだけ自由にしてやつてゐます。時には私も子供等と一所になつて騒ぎ廻る事があるんですよ。子供等が多いもんですから、それにこの邊は一體に子供が善くないので、

子供等は皆兄妹同志で遊んでゐます。」

その時下の方で、『子守唄』を合唱してゐる聲が聞えた。男の聲と女の聲と。それが少し正しい律でなかつたにしろ、自分は心からしみりした柔らかなさを感じさせられた。『あゝ幸福な家庭の人達』自分は薄い涙さへも浮ぶ程、それが有難い事に思へた。

その中に六年生の子が七つ位になる女の子を抱いて上つて来た。

『今晚は。』春子はお辭儀した。

『さあお辭儀するんですよ。』その春子に云はれて切り下げ髪にしたその女の子が美しい眼が溶け出しそうに笑くぼを浮べて笑ひながら楓の様なぶくぶくした手をついてお辭儀をした。

『今晚は。』自分は泣き出し位嬉しい幸福な氣持ちになつてそう云つた。その中にその女の子が後向きになつて壁に指で左字の様な出鱈目のものを書

き出した。

『姉さん。これ読んでね。』と云ひながら何か書いた。

『わからないわ。もう一遍書いてごらん。』

春子にそう云はれてその子が又書いた。が讀める筈のない字だつた。自分は微笑みながら幸福さに酔つた様になつて黙つて見てゐた。

『よめないわ。』春子は又そう云つた。それから二三遍同じ様な事が繰り返されたが、やつぱりその種類のものだけだつた。

『今度は私が書くわ。讀んでごらんなさいよ。』

春子は「ア」の字を左の手で書き出した。が彼女は急に「うそよく」。

これはいけないのね。』と云つて右の手で「ア」の字を書いた。

『アでせう。』その子は云つた。

この時自分は春子の周到さを感じした。何故なら左の手で書かうとして

急に気がついて右の手で書いた所に、妹を思ふ美しい心がひらめいたのだ。その小さな子は、壁に始め左の手で書かうとした時、春子は先きにそれを止めてゐたのだ。

かうしてお互助け合ひ、尊重し合つて育つて行く美しさと幸福さを感じた。

それからお母さんがもう一人の女の子を抱いて上つて来た。四つ位らしく見えた。

間もなく子供達三人とお父さんが圓く座つて物の名の云ひ競ら始めた。

始めは前の人の云つた物の名の後の字をとつて云つてゐたが、後から數多く云ふ事になつた。四つ位の子が兎に角考へながらついて行つた。その眼を光らしながら姉さん達が何の苦もなく云つて退けた後から考へ出すそ

のいぢらしさ！姉さんが教へやうとしてもそれを喜ばず、自分で考へ出さうとする苦しい楽しみ。そこにも此處にも子供の世界がある。

この美しい幸福な家庭！。かうした家庭に育つた者の幸福さを自分は美まずには居られない。暖かいお父さんやお母さんの心持ち、それから兄妹をお互ひ助け合ひ、いたはり合ひ、楽しみ合ふ美しい子供達の心持ち。

理窟では誰でもこのお父さんが云つた様な事を云ふ。然しそれが本當によく行つてゐる所は珍らしい。

かうした絶えず太陽の光線が明るく照つてゐるやうな本當に自由な家庭にだけ性質の美しい子が育てられる。子供の世界に對する理解と愛。それが殆んど完全にいつてゐるのだ。叱る事のない家庭に、叱られる必要のない子が育てられる。お父さんが絶えずがみ／＼云ひ續けてゐる家庭には決して性質のいゝ子が出来ない。云ふ時は云つてもそれが子供の世界をよく

理解してゐて發する言葉であり、又愛にうるほふた言葉でなければならぬ。嚴格といふ事を穿き違へて育てられた子供は不幸だ。

子供の神秘的に世界を本當に知る事の難さは尋常でない。同時に傷つけない様に指導して行く事も又非常に難い。これを忘れて教育は行はれない少くとも本當の意味の教育は。

×月×日

今晚かういふ話を聞いた。

藤井といふ下谷の學校の主席訓導が、全然縁のない、孤子を貰ひ受けて育てゝゐる。

その子は或教師と教師との間に日陰者として生れた子供なので、誰もその子を引きたり度い者もなく途方にくれてゐる時、藤井といふ人が貰ひ受けたのだ。……

自分はこの話を聞いた時、暗い重い感じを受けた。そして藤井先生の美しい行に感心した。

藤井先生は決して子供が無い爲め貰つたのでは無かつた。財産があり集つてゝも無かつた。只美しい義侠心がそれを爲さしめずには置かなかつたのだ。

自分は昔の名高い坊さんが子供を引き取つた話を思ひ出した。かなり遠ふ所があつてもその美しい情に於て或共通點を感じた。

かうした普通の人に出來ない行をし、そして自分は餘り裕かでも無く暮してゐる人の話を自分は感動なしに聞き得ない。そしてその人に中心から感謝する。

かういふ事は決して理屈では出來ない事だ。理屈でだけ修身を小供に説く人にはとても出來ない事だ。本當に深く理屈でなりにびつたりと人間に

觸れ、そしてそこで人と人が寂しく、涙をたへながら抱き合ふ美しさを
感じ且つ信じる人でなければ出来ない事だ。誰が其處に産聲を上げた子
に罪があると云ひ得やう。父や母がどうであるにしろ、その子供は偶然に
其處に生れて来たのだ。自分の爲めにだけ、社会的な名譽の爲め、人の眼
を誤魔化す爲めに、敢て自分の子を育て得ない父母に對して甚だしい侮蔑
と嘲笑と反感を禁じ得ない自分は、藤井先生がそうして喜んで其孤子を貫
ひ受けた事を深謝し敬服せずには居られない。

孤兒がこの世で如何に待遇され、又育つて行くかを考へる事は恐ろしい
事だ。彼等はともすれば人の食餌となる。男は奴隸の如くされ、女は身を
賣られる。自分は曾て、輕業師や、あゝした危険至極な事をしてゐる子供
達は、多く孤兒だと云ふ事を聞いた事がある。『親のある子だと親はすぐに
も飛んで来て、如何に困窮してゐても直ぐに子供を連れて行くから。やつ

ぱり孤子でなければ駄目だ。孤兒は高い所から落ちて怪我をし、或は死ん
でも何の世話もなく旅の先きで片附ける事が出来るからいゝ。』のだそうだ
どうした機であつたか、子供を連れて學校からそうした藝當を見に行く
事になつて行つた時、未だ七つ六つの子供が男の肩の上に立てられた長い
棒の先きに腹を押しあて、『はゝつ。』などい苦しいかけ聲をした時、子供
等は一樣に眼に涙をたへ、女の子は袂を以て顔を隠しさへもした。子供
等は、自分の仲間の一人があのようになつてゐるのを知つた時、涙なしにそ
れを見る事が出来なかつたのだ。そして臆病相に、自分の幸福を感じて
ゐるのが自分には判然と感じられたのだつた。あゝした集團の一人となる
可能性を孤兒は持つてゐる。又女の子だと、ダンス等をやる女となり身を
賣る女となる。曾て美しく装ひ、愉快そうに踊つてゐた一人の地方巡業の
ダンス團の少女が、主人の所を逃げ出し一錢五厘はいつたガマ口を持つて

停車場に行つてゐた事を自分は聞いて知つてゐる。

あゝ不幸な孤兒達。御身達は永久に闇から闇への旅行者では無いのか？。而かも彼等には何等の罪もない。そして社會から退け者にされ、侮蔑され、迫害されなければならぬのだ。

藤井先生がかうした運命を持つた子供を一人救つた事を自分は讃嘆せず居られない。同時に救はれた孤兒を祝福する。

その子の親達を考へるのが恐ろしい。自分はその氣持ちにどうしても同感が出来ない。然し自分は憐む。彼等とて平氣で厄拂ひをした氣持ちで生活してゐるわけではあるまい。苦しい良心の呵責に責められながら、涙をもつて救はれた孤兒の上を祈つてゐる様に思ふ。

母が自分の子と離れる心持ち。よくそれに堪えられた事を自分は不思議に思ふ。少くも自分は次の事を信じ且つ願ふ。

その中必ず父である人、母である人が藤井先生の所へ來てその子を貰ひ返して行く事を。

そしたなら藤井先生も喜んで子供を離してやられるに違ひない。長い間育てた愛は深いにしても、その愛に對しての理解が多ければ多い程、今迄のその人の非を責めずに喜んでやるに違ひない。

單に名譽、社會的な事の爲めに、何の罪もよい子供を棄てるといふ事は不可解な事だ。名譽やそうした種類の者以上のものがある事を感じぬ人、自分は呪ふ。

そういふ人は自分で自分の存在を否定し、侮辱してゐる者だ。

藤井先生がかうした子供を育てゝゐる事を多くの人は知らない。先生は自分からそんな話をしないからだ。

教育者の資格、有難さは、簡単に第三者には解らない。謹み深い人であ

ればある程、それは解り惜い。そしてそうした人の常として多くの場合、不遇な地位に立たせられる。自分の非を覆はん爲めには如何なる手段でも平氣で爲してゐる教育者なから。贈物さへ少し多く持つて行けば如何なる主要な位置の人も動かし得、そして自分が完全な者として存在する事が出来、その人が如何に立派な本當の人間らしい行をしてゐる人でも、そういう事は何の價値も認められず、敗残者の位置に立たせられ、侮蔑されなければならぬ現状なのだ。だからたまらない。それが實に多い社會なのだ。眼の霞んだ人の多い世の中なのだ。教育者を取扱ふのに、精神でやる時代が何時になつたら廻つて来る事だらう。精神の仕事は物質だけに生きてゐる人には解らない。

今迄に、中心子供の事を考へ、自分を犠牲にして来た人が、無慘にも、汚れた感情の爲めに校長や當局の者から一蹴された事實を自分は知つてゐる。

る。

自分は次の様に言葉を想像しなければならぬ事を恐ろしく思ふ。

『私は正直過ぎたのか不可なかつたのだ。あまり自分の生徒達に忠實過ぎたのが不可なかつたのだ。今の世は嘘でも兎に角甘く誤魔化してさへ通せばそれで成行するのだ。上の者を甘くごまかし仕事を誤魔化し、そして上面だけ立派に見える様にすればいいのだ。何も深く考へる事は要らない。贈物でも少し澤山する様に心掛ければそれでいいのだ。常事者もそれで氣嫌よく思ふ通りになつて呉れるのだ。人物本位とか人材拔擢といふ事は表看板に過ぎない。』

兎に角私は正直だつたのか不可なかつたのだ』と。

あゝ美しい藤井先生の心。自分は先生の上に微笑む運命を希はずに居られない。かうした教育者を持つ事が、自分達の力ではないか。

×月×日。

今日自分は思ひ切つて校長に話して見る氣になつた。といふのは児童文庫をどうかして拵へ子供に讀物を授けてやり、そして雨天の日、屋内の運動場が狭くて子供が教室に居てごたくしてゐて無駄に時間を過してしまふ事から救ひたかつた爲めに、一つの具體案を話して許して貰ふつもりだつた。そしてそれが非常に簡單に行く事でもあつたのだ。

それは少し自分が綴方に自信があり考へがある所から綴方を本當に子供の生活に即したものにし、健全なものにして見たいといふ慾求から起つた事で、理想に近い綴方を書かせ、これを文集として出したいといふ事であつた。それには自分か受持つてゐる學級以外に特別に他の或學級も受持つて研究し、先輩の某氏の級のご一緒にすれば充分一冊をなすだけのものを作られたので、他の一學級に綴方をやらして貰ひたいといふ事を校長にお

願しやうと思つたのだ。そしてそれを出版して幾何かの金があれば、それを基本金として、あとは父兄から寄附を仰がうといふ計畫だつたのだ。最も出版して呉れる所に就ては色々奔走した末、或所で出版して呉れる事になつてゐたのだ。これだけの準備をしてから自分は校長にお願したのだ。自分は内々斷るだらう事を然れてゐた。何故なら寺崎校長には自分の發案のものでなければそれを禁じたがる悪い妙な捕はれた考へがあるからだ。つまり自分以外の優越は絶対に認めないとする意固地があつた。勿論口ではこれを反對の事を云つても、實際になるとそれが露骨に判つた。それに自分が色々思つた事を發表してしまふので、自分を反撥してゐる或神經を自分は感じてゐたのだ。然し今度の事は個人關係で律する事の出来ない事であるから、いくら校長でも許してくれるだらう事をかなり期待してもゐた。『そうですか。まあ考へて見ませう。』

校長の答はかういふ冷い答だつた。自分は腹の中で云つてゐる事を感じた。もうそれ以上突つ込んで云ふ必要を認めなかつた。

案の定、その組の擔任を通じて返事が来た。それはかうだつた。

『級にたぐさんの先生がはいり込む事がよくないからこんな事のない様にして貰ひたい。』

自分は齒ざりをした。むら／＼と起つてゐる怒が心の中をむしやくしやにした。何故自分に許されぬといふ事があるか。他の先生が入つて悪ければ自分以外に現在はいつてゐる先生もやめさしたらいいではないか。それ自分だけを断るとは何といふ事だ。然かも自分が自分の時間以外に望んだ事だ。一日五十枚平均に子供の綴方を見なければならぬ事を覺悟の上でした事だ。何故自分が行く事が子供の爲めにならないのだ。自分は断然云ふ。必ず子供の爲めになるのだと。

然し自分の不満はやがて其笑に變る事が出来た。何故なら校長の心があまりに見えすいて、一種の憐れみの情さへ起つて来たからだ。自分を尺度としてだけ考へる人、それから自己の生存の意義は、他を否定する事に依つて生ずる程度の人であるからだ。

自分がかうして跳ぬ退けられた事がこれで二度目だ。一度目は兎に角最後迄、つまり児童文庫の事を話す勇氣があつた。然し二回目はとてもそんな勇氣がなかつた。

これが現代の校長であらうか。然かも選ばれて亞米利加迄行つて来た校長なのだらうか。大切な子供の事を考へずに私情を以て生きて行ける人、あゝ自分は餘りに云ふ事かない氣がする。それとも自分の考へが間違つてゐるのだらうか。

兎に角児童文庫は現在に於て大切な物の一つな事が事實だ。學校の現在

の狀然に照してこれが不必要だ云ひ得る人が有らうか。雨が降つて教室に閉ぢ込められてゐる子供は一體どうなればいゝのだ。『騒ぐな。静かにせアメリカにはこんな不規津な子供が一人もない。』ではとても納まらない。それは餘りに無理だといふのは職員に誰にも解つてゐる。が校長のお目玉が怖いので無理やりに抑へつけてゐるのだ。校長には職員といふものは、決して校長に劣る程度で小供の事を考へてゐるのではない。それ以上深く感じ考へてゐるのだ。といふ事が一向解らないのだ。

適當な施設をしてやらずに居て、無理やりに小供を思ひ通りにしやうとする。今の世にあまり通用したい事だらう。

校長が曾て或職員の注意によつて豆本的な讀物を嚴禁した事がある。それはなる程至當な事だ。然し子供があの豆本類を讀むに至つた動機を考へて見るがいゝ。一つは子供獨特の空想に對して或満足を與へやうとする事

もあるのだが、より以上直接な原因は、學校で讀む物を與へてやらないと云ふ事だ。小供は自分で決して選擇をする事が出来ない。如何なるものがいゝか見當がつく筈がない。『そんなつまらぬものを讀まずに、いゝ本を讀みなさい。』といったわけでは何がよくて、何が悪いか見當がつくものではない。單にそういつてやるだけでは『讀むな』といふのと同じだ。そんなら教師の方で選擇してやればいゝのか。それはいゝに違ひない。然し校長に睨まれる事を恐れなければならぬものは、自分が選んでも後に責任の來る事を恐れる。もう一つには何を選んでいゝかに大いに迷ふ。それと校長から豆本を禁止する場合、子供の生活の上から考へて、かういふ種類のものがいゝとでも具體的に示されたなら力を入れてやる事も出来るのだが、無責任なぼんやりした事では職員はそれを有耶無耶にして了ふのが寧ろ當然だ。その結果學校では讀まないがお使の途中などで、豆本程度のも

盛んに読む様になる。それが彼等には一番面倒がなくていい事なのだ。學校へ行つてどんな本がいかを先生に聞いて見る。すると先生は一體何錢位のを買ふ積りですかど聞かなければならない。子供は何錢位なのかも内へ行つて相談して見なければ判らない。そんな面倒臭い事よりは一その事簡単な方法をさるのが彼等にとつて寧ろ當然だ。仲には眞面目に聞いて買ふ子もあるが、それはほんの僅かの者だけだ。それに各々で本を買つて讀むといふ事は實は随分大變な事だ。『無駄にお錢を使はずに藏つて置いて本を買ひなさい。』それはいゝに違ひない。然しそれを本當に實行する事は六かしい。それに安い本には相當にいゝものが少い。どうしても少し高いものでなければいゝ本がない此頃の狀態なのだから無理に買へとはとても云へない。が子供の時から讀書の習慣を作る事がどれだけ大切な事か判らないと誰でも云ふ。勢こゝに兒童文庫が設立されなければならぬ様になつて

來るのだ。本を見なければ日比谷の圖書館へ行けばいくらでもあるといふがわざと電車賃をかけて、子供が日比谷迄出かけるものか。若しあつたにしろこれは本當に少數な子供だけだ。決して無いではない。現在夏休み時々日比谷の圖書館へ通つた感心な子供を自分は知つてゐるのだ。校長が言を左右に托して避けるのは結局本當に子供の事を考へてゐないからだ。もう一つは自分が第一讀書をしてゐないからだ。それが實際なのだから仕方がない。本の有難味の解る者は、讀書をする者だけだ。自分を少しでも磨き上げやうといふ願ひのある人は本にすがり付くのが第一だ。大人は自分で自分の傾向に依つて本を需める。が小供はそうはいかない。自分は自分の不完全さを知らなければ知る程勉強しなければならぬ事を切實に感じる。従つて本も讀みたい。然し校長の様に自己を完全な者と決めて押し測るだけの度胸と自信とが出来れば何も讀書する必要がない

かも知れない。従つて子供に本を讀ませる習慣を作る事も必要がなく、子供の奔放な空中へ躍り上らうとする空想的な慾望も芽もそのまゝにおし潰し、もぎ取ればいゝのかも知れない。が自分達から見れば實に忍び難い事だ。それは寧ろ罪惡ださへ思へる。

『自分に金があつたら。』よくそう思ふ。自分は小さいながらも自分の學級にだけでも文庫を拵らへて、子供の頑具ない魂の楽しい遊園の場所を與へてやり度いのだが。

自分が金が足りない事を云ふと校長は常に變な眼で眺める。今の生活で本を買ふ金は如何にして拵へやうかといふ苦しさは本の必要の無い校長には一向解らない。況して心の中で學級にだけでも少しでも本を備へ度いといふ考へがある等といふ事は間違つても考へる事が出来ないのだ。

自分は色々なかうした種類の事を考へた末學級で小さな雑誌でも拵へて

樂しまうかとも考へた。そしてそれが少しの間行はれた。が子供は自分のやる事に非常に愛を持ち、直ぐ又不満を感じる。それ以上のものを一足飛びに望んで終ふ。決してこつ／＼とやつて行くといふ事は、殊にかうした種類の事に對しては望まれない。

あゝ不幸な子供達！。自分は時々かう思ふ。身體を置く場所が兎に角あつても、魂の楽しい遊び場所を持たないのだ。

自分はどうかしてそれを設けたい。が金の無い無力な自分には今の所とても出来ない事だ。『可愛い子供達よ。許して欲しい。』かう云はずには居られない。本當に無力な自分なのだから。

自分が隙のあり次第『話し方』をさせるのはお互が讀んで面白いと感じたお話を皆に平等に分けて、不完全ながら楽しい魂の遊び場所を提供したからだ。又時々雑誌を持つてゐる子供に自分が讀む所を指定して皆の前

小學教師の手記

で讀ませるのもその爲めだ。
決して隙潰しの爲めでは無い。そして又話が上手になつて欲しい爲めでも無いのだ。

自分の児童文庫設立の計畫はもう少しといふ所、只校長が許していい所を許さなかつた爲めに失敗に終つた。それは決して自分だけの口惜しさではあり得ない。

△×月×日。

「下界からすんど跳ね上つた天の下を急がしく電車が通る。

自動車が通る。俵が通る。

遠くでは友達同志呼び合つてゐる汽笛の音。

黒い帽子を被つた背廣の男、金釦の制服の學生それから袴をすんど短く穿いた女學生。

皆定められた場所を埋めるために勇んで朝の空気を慄はせながら歩いて行く。

この力に充ちた雑沓。

そして底からノと天に向つて湧き上つて行く絶えないオーケストラ。

そしてその中を自分は元氣に靴をふみしめながら、辨當の布呂敷包みをかへて行く。自分の定められた場所に行く爲めに。

喜びと祈りとに聖められて。

あゝ朝の充實と歡び。』

多くの日の様に自分は今日も歡びと元氣に充ち、そして詩を胸に懐いて出て行つた。

然し自分は又多くの日の様に敗殘者の悲しみを味つて歸つて來なければならなかつた。おゝ虐げられた者、自分の生活を踏み躪られた者の悲哀。

一時間目は自分は幸福だった。子供等の元氣のあふれてゐる顔を見た時自分は自然の持つてゐるものの中の最も大きな美を見た。やうな氣かした。又人間に宿つてゐる自然の本當の姿を見た。

『お前達の生活は本當だ。我が美しい子供達よ』

自分の心は微笑んだ。

人間、汚れた人間を離れた至純さの前に自分はいつもの様に、敬虔になり得た。

『お、教育者に許された喜びよ、人間の心と心が直きに觸れ合ふ喜びを感じて、感ずる事の出来る者にだけ許された尊い幸福よ消えずに居て呉れ』

自分はいつもの或る祈りを感じた。

然しこんな事を云ひ、感じる者が今の世では教育界の異端者だといふ事だ。自分の云ふ事は間違つてゐるだらうか。自分は本當だと飽く迄も信じ

る。少くも自分は人間の心に觸れる喜びを理屈でなく本當に感じる事が、教育者として、最も大切な資格の一つであると思ふ。『概念切りない、干からびた、香の抜けた者共よ。恥を知れ』と自分は云ひたくなる。修身の概念を不消化のまゝつめ込み、上の者のお氣嫌をとり、社交とかいふものをうまくやる事を、後生大切に守つてゐる化石した人間は少くもそろ／＼此の世から足を洗ふべき時期が來てゐるのを覺悟するのがいふ事だ。彼等は何でもいゝ加減解つた顔をする。本當に解るといふ事は理屈ではいかない事だ。その人の生活との全き結合だ。今の世の中で解つた様な顔をして、そのくせ一番解らない人間の多いのは教育界だ。彼等は猫も杓子も完全者であり、人間の模範だと考へ様としそれを子供に強いる。何といふ冒瀆者であらう。大なる者の前に恥ぢるがいゝ。完全者といふ者は人間の心の化石した石地藏の様な者を云はない。そして完全者といふ者は恐らく此の世

にあり得ない。自分以上の大きな力と意志とをびつたり感じる事の出来る者は、自己をだまじ、人をだます事なしに、大きな力の前に膝まづいて、自己を生かし、正しくし、人のいゝ性質を探し出す出が出来る。然しそれ等の事を感じる事の出来ぬ者は自己を完全者ごでもしなければこの世の生存の意義を失つてしまひ、従つて、教育者といふ資格を失つて了ふのだ。自己を偽り、人を偽る。それが生活なのだ。

あゝ何といふ事だ。自己を殺し、同時に人を殺す。それが今の世の教育なのだ。自己を生かし、同時に人を生かして行くそれが教育でないのだ。少くも異端者なのだ。あゝ、本當の意味の教育者が出て来なければ今の教育界は救はれない。自分はいつでもそう思ふ。その度に自分の微力が恥かしくなる。

自分はどう考へても今の教育界には適さない人間らしい。自分は人の氣

嫌をとつて自己のやましさをかくし、地位を進めて貰ふ事を希ふ事が出来ない人間だ。自分を偽る事の出来ぬ人間だ。心を潰す恐ろしさを自分は、あまりに知り過ぎて居る。

自分は時々『一その事、自分は教育界を去つてしまはう。自分は自己を生かして呉れない、偽りの固りの中にある事を甘んじてゐる必要がない。』と思ふ事がある。然し朝になつて自分はそれ等の事をいつも忘れてしまふ。そして今の様な氣持ちになる。自分はその時、その氣持の少しでも長く續いて呉れる事を願ふ。そして私の愛する子供等が、自由に呼吸して、思ふ様に擴がつて、うるほひに満ちた心の中で躍り狂ふてくれる事を希ふ。

今日Yとい子が、皆が熱心に讀本を復習してゐる時、突然小聲で唱歌を歌ひ出した。子供等は一齊にごつと笑つて、自分とYとを半分づつ眺めながら笑つた。自分の心はその時微笑んだ。『彼等は如何に振舞ふとも、自分

の愛の擴がりからは決して飛び出す事は出来ない。』
自分はそれから或簡単な話をした。ばつと群雀の様に飛び立つた彼等の心を或中心に導く爲めに。子供等は又静かになつた。そしてそれと熱心に鉛筆を動かした。彼等は安心して自分達各々の住家を造つてゐる様に見えた。

然し。實に然しだ。自分は果してかういふ時間は一日に何時間有る事だらう。只の一時間も無い日もある。絶えずいらいらして過し自分の心を憎み、人の或る心持ちを蔑み、そして暗い心になつて了ふ。
或時は自分の大切にしてゐる平和が、Yがやつた事の様な種類の事で遂破裂してしまふ事がある。その時自分は極端にその子供が憎くなる。そして怒鳴りつける。自分の心はその時外に對して荒い事を云へば云ふ程、自分に對しての憎しみが高まつて来る、最後に自己絶望に近い氣持ちとなる

自分は常にそれを恐れて居る。隠れて居る悪魔が平和を破つて飛び出事を。

五時間目。

自分は兎に角平和に、うるほふて一日を過して笑つて子供等を門で送る事が出来た事を感謝した。

五時間の授業が始まつてから、自分は教室に行つて少し仕事をして職員室に歸つて来た。職員室の窓に身體をのしかけて外の方を見ることもなく見た時、眞白な砂利の上で六年の男子が體操をして居た。元氣にうち切つて。ふと屋内運動場を見ると、そこにも女の子等が體操をしてゐるらしかつた。一方の列の者は腰掛臺に腰をかけ、一方の列の者は足を支へてゐた。六七人の子供が顔に手拭をあててゐた。が自分は汗を拭くのだらうとぼんやり思つた他、何も氣がつかかなかつた。それから外で勇ましく動いてゐる

小學教師の手記

男の子の方を見又女の子の方へ眼を移した時、女の子等は以前と同じ姿勢であつた。手拭を顔にあてゝゐる子供が前の三倍にもふへてゐた。といふよりは殆んど全體だつた。自分は始めて『へんだな』と思つた。その時子供等の啜り泣きを聞いた。

自分は吃驚して椅子から立上つた。子供等の泣き聲はもう啜り泣きでは無かつた。かなり高く聲を出して泣き始めた。自分は身體の中をぞつと冷たく水でも流れる様な氣がした。自分は慄へ上つてしまつた。恐ろしい不安が自分を揺すぶつて起つて來た。

『どうしたんです。一體。自分は少し眼に充血してゐるその受持の女教員に聞いた。その女はこの時迄友人に何かべちやべちやと恐らく子供を泣かせなければならなかつた説明をしてゐたらしかつた。

『あゝでもしなければとても駄目ですよ、あんまりですもの。』

自分は何もかも解つてしまつた。『何か氣に喰はない事をしたのだ。いつも教室で一時間、じつと座らしたまゝびくとも動かさなかつたといふ事だ。又全體の生徒を梯子段に立たせて一時間を過ぎさせたのもこの女だ。又此女の先生の悪魔が飛び出してしまつたのだ。』と自分は思つた。『たまたまい奴だ。』と思つたが口には云はなかつた。その中にも子供等の泣き聲が高まつてゐた。自分はちらと校長の方を見た。校長には聞えないのか、又當然だとも思つてゐるのか平氣であつた。そして間もなく外出して了つた。

自分の不安は高まる許りだつた。身體が慄へ出しさへもした。自分は最近この位不安な恐ろしいとでも云ふべき氣持ちに襲はれた事がない。自分は黙つて腰かけてなごゐる事が出来なかつた。溜息をつきながら出鱈目に職員室の中を歩き廻つた。

自分はとうとうたまたまなくなつて室を出て屋内體操場の方へ出て行つた

小學教師の手記

その時職員室には女教員がゐなかつた。『あの可愛相な子供等を何とかしな
ければならぬ。自分の心はもうこれ以上たえる事が出来ない。』と思ひな
がら屋内體操場にはいつた。子供等の泣き聲は一層強く自分を揺り動かし
た。自分はいら／＼し出した。

『おい／＼。呼んだが泣き聲は止まらなかつた。』

自分はそれから眼を眞赤に泣きはらして咽び泣いてゐる級長の所へ行つ
た。

『どうしたのだ一體。』

『〇〇さんと〇〇さんが笑つたので、私達皆叱られたのです。』級長は泣き
聲の間からかう云つた。その眼は何を語つてゐたのか。あゝ自分はその怖
ろしさに慄へ、何かにすがらうとしてゐるいちめられ抜いた瘦せ犬の様な
眼を忘れる事が出来ない。猶恐ろしい事に、その眼は呪ふてならない者を

呪ふてゐたのだ。

『あなた方はそうしてゐても仕方がありませんよ。あなたと副級長の人と
その悪かつた人をつれて先生にお詫びに行らつしやい。』

がその子は立たなかつた。その中に外で體操を終へた男子はわあつと凱
歌と嘲笑との聲をあげてなだれ込んで來た。男子の方の先生はそれを外へ
出してやつた。

自分は又級長にすゝめた。級長は立ち上つて眼をこすり、咽び泣きなが
ら歩き出した。續いて子供等は皆立ち上つた。そして職員室の方へ歩いて
行つた。咽び泣きの聲を高く立てながら、異様な行列を作つて。

女の先生はごここから出て行つてその列をとめた。一同は又屋内體操場の
方へはいつて行つた。

自分は職員室にはいつてからさう／＼怒鳴つてしまつた。

「人間の心を持たない馬鹿者奴」と。

然しそんな者に限つて「子供を大切に思ひ、少しでもいい、人にしやうとするから叱るのだ。」

といふに違ひない。云ふのを恥ぢるがいい。勝手に低能な頭で、自己本位に考へ出した辯解はその人間の下らなさを示す許りだ。時には叱る事も不必要でないに決まつてゐる。が叱り方はそれでいいのか、人間の心を暗くし、呪を起させる叱り方は人を少しづつ殺す事に氣がつかないのか。本當の叱る事、論ず事は、それによつてその者に或る光明を與へ、幸福に入る鍵を與へるものでなければならぬ。

自分は自分の仕事を恐しくなつて來た。たまらないと思つた。

自分は敢て云ふ。その女教員に向つて。

「あなたは人間の心といふものゝ尊い存在を知つてゐますか。云ふ迄もな

くわかつてゐますまい。そう云はれるのが恥だと思ふでせうが、然し事實は證明してゐます。知る人、感じる事の出来る人は云つてゐます。あなたはあなた自身に恐ろしくなり、憎くなりませんか。多分そんな事はあなたにはないだらうとは思ひますが。あんな事をしなければならぬ自分をどう思ひますか。あの無垢に近い少女の美の充ちてゐる可愛い罪のない子供達を呪ふた貴女自身を。

あなたはあの少女の持つ特殊の美を讃へる事が出来ませんか。純粹に燃えてゐる眼、生命の漲つてゐる手や足、そして美しい髪。あなたは美を少しでも感じる事が出来る人であつたら、又あの頃の少女時代を美しく過して來た人であつたら、あの美を守つてやるのはあなたではありませんか。それに眼を泣きはらさせ、心を暗くし、呪を起させるあなたは一箇の悪魔なのです。

あなたは又あんな事を教育的だと考へてゐるなら悲惨な事ですよ。あなたにはあれによつて虚偽を教へるものだといふ事を知りませんか。恐ろしい事ですが、あなたにならされたあの子供等は少しそれを知つてゐる事に気がつきませんか。

私はあの子供の気持ちを説明してあげませう。

『子供は泣き出す瞬間は全く純粹なものです、云ふ迄もなく。然し泣いてゐる中に自分の感情を自身で虚張して來るものです。泣き聲は次第にそれを強めてゆくものです。私はあの子供等に幾分それを感じたのでした。同時にあなたは自分の心を虚張してゐたのです。悪魔は更に悪魔を育てる事に努めてゐたのです。それが嘘だと云へますか。自分の心を本當に見つめる事が出来る人であつたら、それに気がつくはずですよ。』

兎に角あなたは恐ろしい事をする人です。恥ぢを知らない人です。人間

の心を感じる事の出来ない人です。私はあなたが本當の道に向く事が出来る人なら今の中に向き直つてゆく事を望みます。』

かくて自分はいら／＼した暗い不安な敗殘の気持ちになつて、自分の仕事を呪ひながら歸つて來た。

×月×日。

今日一日自分は昨日生徒を苛めて泣かせた女教員のCに遇ふ事を避ける事に努めた。その顔を見る事に依つて、自分の気分を暗くする事を恐れた憎みが露骨に表れて來る事を恐れたのだ。

放果後になつて廊下を廻つて歩いてゐる中に、學年會かなんかで同學年の人達と一所に何か喋舌りたてゝゐるCを見た。自分はふと『しまつた』と思つた。

「這入つて來給へよ。」Aとい若い男教員が自分を見つけて笑ひ乍ら云つた。「あゝ」自分は氣のない返事をした瞬間Cと顔を見合せてしまった。その時不思議に自分の心は和いでゐた。微笑みながらその室にはいつて行つた三人に圍まれた中には、ワツプルと柿とが少し宛残つてゐた。

「いへ所へ這入つたもんだね。」この戯談が極めて自然に出た程、自分の心は隠かになつてゐた。それは勿論眼の前にあるCを無視し、軽い蔑みを感じる事によつて起つた心持ちでもあつたが、一方には我が生徒の前に充分に今日の捧げ物を了へてしまつたといふ安心と満足とが手傳つてゐた。

「さあどうぞ。」Cは柿の皮を剥いて自分に出した。

「時にCさん。昨日どうしてあんなに子供を叱つたのです。おい／＼聲をたて、置く位さ。」Aは云つた。自分の顔を見ると同時に、昨日の自分の興奮した顔を想ひ出して云つたものらしい。

「だつてあんまりなんですもの。」Cは笑ひながら云つた。

「何がです。あなたがあの子供等に酬いなければならぬ當然の事をしたとでも思つてゐるんですか。自分は知らず／＼云つてしまつた。自分の心の中にはむくむくと或物が頭を擽げ始めて來た。

「あれではあんまりです。一體何故あなたはあんなに迄しなければならなかつたのですか。」Aは語をつゞけてなじつた。

Cの顔はその時強敵を眼の前に發見した時の用心深さを以て緊張した。どうしたらうまくこの場合を切り抜けるにいかを暫く考へてゐる様に見えた。

「あの位の事は當然の事だと思ひますわ。」Cは金の入齒をした口をへんにゆがめて冷淡に云ひ切つた。

「何故です。」Aはすかさず突いて行つた。

小學教師の手記

『だつて讀本にもあつたではありませんか。規律を守る爲めには、孔明は馬謖さへも斬らなければならぬ場合がありましたわ。』

『そりやあなたの解釋の仕方が違ひます。』

△がかう云ひ出した時、自分はもう居たゝまらなくなつて室を出てしまつた。何も云ふ必要も無ければ、聞く必要もなかつた。すべては解つてゐた。

『五寸尺で五寸計つたゞけの事だ』

が何といふたまらない事だらう。この位見當違ひな事もあまり情ない事でもあるが、Cの生活はこれ以上の所に入る事が出来ないのだ。生活があらゆる事の定規だといふ事は恐ろしい事だ。三百倍の顯微鏡では、それ以上の物を見る事が出来ない。

自分は今孔明の深い心の中に喰ひ込んで荒し廻らうとは思はない。たゞ

孔明が生かし得たものは他人も同様に生かし得るものだといふ事は斷じて云ひ得ない。殊にCに於て然りだ。鳶の眞似をした鷹は子供にも笑はれひどい目に遇つた。縦令いゝ事であつても人の眞似を無條件でするといふ事は不可ない事だ。その人間の生活が深い交渉を持つ事が出来ずに形だけ眞似る事は凡そ滑稽な事だ。或時は滑稽が通り越して悲惨にさへなる。『これが自分に許されてゐるかどうか。』の深い省察もなく、出鱈目に手をつける事は、どうしたものか教育界の人に多い。誰かが變つた何かをやると、おいそれとすぐに眞似をする。無條件で吸ひ入れて無條件で吐き出す。彼等には自己の生活といふものは全然ないと思える。

胃腸の悪い人は、幾等人まねをして健康な人にとつて非常に營養に富んだものを食つても、害にこそなれ、決してその人の養はないものだ。

これ悲しい事實なのだ。

小學教師の手記

孔明もかういふ人にあつてはかなはない。校長もかういふ事をするのを見、且つ知つて、それを當然の事とし、教育者はかうなければならぬと考へ、少くも教科書に在る事をこの位は生かさなければならぬと考へ、そして我が意を得たりと考へて内心満足をしてゐる事を自分は知つてゐる。

『呪はれた學校教育よ。』

誰か靈の眠覺めた、或は眼覺めかけた人で、かう思はない者があらう。勿論もうその人から大切な中心が抜け出してしまひ遠くで咽泣いてゐても、何等の響きも感ずる事の出来なくなつた、又はなりつつある人々が多いのだから、そんな人が案外少いかも知れない。然し自分はそういふ眞剣に生きてゐる人が多くある事を願はずには居られない。

一體教育界といふ所は何といふ概念家の多い所だらう。概念で凝り固まつてゐるのが所謂教育家だともいふ様な状態だ。生々しい動いた人間の心

はもう遠く去つてゐる、それで安心して、少くも自分にはそう見える。生きて行く事が出来るのは奇蹟の様に不思議でならない。その人達が、最も生まな子供を導いて行くのだから大抵の事は解り過ぎて居る。従つて孔明が飛んだ所に飛び出したりする様な喜劇がおこる。

教育者と概念の事は、後で書く機会がある時書くとして前に戻る。

自分はCの人格の中へどこ迄も惨酷に切り込んで行かうとはしない。それだけの興味も感じてはゐないし、益の無い事だから。然しCの教育者として、或自惚に對しては、自分は黙つてゐるわけには行かない。

自分はCの受持の或生徒に、あの様な事が度々あるかどうかを聞いて見た。その時その生徒はかう答へた。

『え、いつでもなんですよ。教室で誰か一人悪い事でもすると、すぐ昨日の様に叱られるのです。』そしてその生徒は下を向いて砂利を足ではじくり

廻した。はにかんだ少女特有の心のやり場に困った様に。又柔い何かに心が繋がる事が出来た喜びを感じた様に。

自分にはあきれより他なかつた。『可憐な子供達よ。』自分の心は泪ぐんだ。

自分は憶ひ出した。

『C先生に生徒がなづいてゐる様に見えるのはどうしわけか君知つてゐるか。』或人が云つた事があつた。その時その人はかう説明した。

『あれは何も羨む程の事ではない。却つて輕蔑しなければならぬ種類の事だ。何故つて、生徒がCの御氣嫌に背く様な事があれば、その生徒は直ぐに悪者に見られる。従つて彼女等はなづいてゐる様に親しんでゐる様に、感謝してゐる様に見せなければならぬのだ。皆虚偽なのだよ。現にCに教はつた生徒がすぐ彼の手から離れると、苦しかつた並々ならぬ壓迫を受け

た事をしみて話した事があつた。『C先生は善い様で、そのくせ最も意地悪な先生ですよ。』だどさ。『何故そんなら、あの様になづいた様に見せたのだ。』と聞いた時、前の様な事を聞せられたのさ、つまりCといふ奴は本當の事、正しい事などは一向わからない奴さ。あの位低能な者も一寸珍らしいね。つまり生徒がなづいてゐる様に見えるのは、嘘に對しての正當防衛なんだ、虚偽を以て報いてゐるんだ。繋がりなどは全然ないのだよあれでゐて校長からの御覺えが芽出度いんだから、何れすべては決まつてるさ。』

自分は思はず溜息をついてしまつた。

自分はそれから女に五六年、殊に六年の女を持たせる事に就いて考へた。女の教員にあの位の少女達を委せるといふ事は或意味でいい事だ。勿論Cの様な者の場合は別として。

つまり、あの少女時代を深く味つて来た、理解のある、美を現はさうと

努力しない所に、自然と獨有の美が現はれずには居ない事を、深く考へ知つてゐる者であるならば、誰よりもその少女達を導くに適當してゐる。六年の女の子を女教員に擔任させるといふ事はその意味だけでいゝ事だ。學課の事などを考へてはとも女教員には委せかねる事なのだ。只その一點だけなのだ。然し、Cの様な者は立派にその資格を失つてゐるといふよりは害があつて少しも益のない者なのだ。それよりは寧ろしつかりした男の教員の方がいゝに決まつて居る。勿論先きの條件を土臺にして、少女達を生かして行ける者であつたらだ。所が無理解な、といふよりは寧ろ何もわからない校長連は無條件で女の子には女教員と決めてしまふ何等の省察も無く、そして子供はそこで虐げられるのだ。

何といふ馬鹿々々しい事だらう。嘘の世の中なのだらう。

自分に今日もこの様な事を書かせた問題の孔明が馬褸を斬つた所は、讀

本にかう書いてある。

「孔明は、にして甚だ規律を重んじたり。或時將馬褸孔明の軍令にそむきて大敗す。孔明諷の舊功を惜しみしかど、軍律を亂さん事を恐れ、涙をふるつて之を斬り、又自ら責を引いて位三等を下せりとぞ。」

自分を斬つて呉れる孔明を悉皆知り盡してゐる馬褸は斬られても幸福だつた。孔明と馬褸にだけ許された世界があつた。然しCは許されてゐない世界を荒し廻つて、不幸の種を蒔いてゐる事に気がつかないのか。

恐ろしい事だ。悲しい事だ。呪はれた子供達よ。どうかして美しく正しく生きる事のためにたたかってくれ。

×月×日。

今日は何もかも美しく見える日だ。

掃除の時使ふ汚ない筈のバケツの中に挿し込まれてゐる赤と白の菊の花

小學教師の手記

はへんに美しい朝教室にはいつた時、びつくりした程それは美しかった
子供等が勝手に無雑作に一本づつ放り込んで行つたに違ひない花は、決して
自分を囚へて終ふ程美しい筈がないものだった。がやつぱり美しい。

『そんな筈がない。』と思はうとしたが駄目だった。生花も何も知らない子
供達の挿し込んだ花はそこに我儘な、これもこれも競つて美を發散してゐ
る様な自由な美を持つてゐた。宇宙に漲つてゐる我儘な強い力をそこに切
り離して見せられる様な氣がした。

子供達は授業の隙々にはその菊の花と睨め競らしてた。自分の持つて
來た花を探し出して微笑んだりした。そこには目に見えない繋がりがあり、而
かも生々々々見えてゐた。自分は見ることもなくそれを見てゐた。人の幸福を
そつと盗む様な氣持ちで。

自分は室中、菊によつて平常よりも生々々々した子供を見た。まるで室から

盗れる様な氣がした。生々々々若い芽が、そこにもこゝにももく／＼と
延び上つてゐる事を感じた。

三時間目は理科だった。この菊は此の時間には子供達によつて皆ひきま
しられ、白い細長い切れ、白い切れとならなければならなかつた。或子供
の眼には『今にひきちぎつてやる』快感とほこりが出てゐる者もあつた
理科の時間が來た。

彼等は手に手に菊の花を持つて一様に微笑んだ。そして一々繊細に眺め
廻した。或者は花に鼻をつけて心のゆく迄その香を嗅いだ。或者は思はず
聲高に何か口走つてすぐと口を拭ふ様にして教壇の方をちらと見た。或者
は他の者の花よりもいゝ花である事を示す爲めに、花を高くさし上げた。
彼等の心には、もう立派に菊の花の美が生かされてゐた。説明以上の所

で感じてゐた。自分は暫くの間、ちつと子供等に溢れてゐる喜びを見つめて居た。

自分が話し出した時には、子供等は菊の花を大切さうに握つたゐて、一様に自分の方を見つめた。その顔は皆潔められ、輝いてゐた。彼等は只魂の存在を知つてゐるに過ぎない様に見えた。説明し出した時、氣早の者はもうむしりかけた。そして小さな筒の中を念入りに覗き込んだりした。或者はまだむしりかねて他の者がむしり取つた小さな瓣を額と額を突き合して覗いてゐた。

此の美しい繋がりを、どう生かし、如何にしてその上に立つた授業を完全に近く済す事が出来るかを考へなければならぬのだ。然し、教師はそんな事には一向無頓着に、子供等にとつては全然別な意義のない世界をそこに造へやうとするのだ。或者が見たならば、如何にせば最も不完全な、

そして無意味な教育をする事が出来るかを試してゐる様に見えるだらう。又有つた筈の物を盗み去られた様に情ない、空虚な顔をしてゐる子供等を發見する事だらう。

無限な味を有限にして丁ふ事は何といふ下らない事だらう。どうせその有限の程度も知れ切つてゐる。「教師の生活」といふ鑄型に入れて限定された物の程度は判り過ぎてゐる。無限といふ尊い味、感じを、それとは無關係な空虚な物として、子供等に與へてやるといふ事は情ない事だ。よく云はれる言葉だが、味の失くなつた鹽として供へられるのだ。かくて材料は何とも繋がりを持たない、従つて子供自身の生活とも何等の交渉を持たない、渺たる一存在として枯渴したものとなり終るのだ。

縦令只一本の野に咲いてゐる野菊にしる、それを見た時、自然の大きなオーケストラ、又は調和の中に、恵みを受けて育つてゐるといふ事が感じ

られる筈だ。その感じは實に永遠だ。その人の生活さへしつかりしてゐる人であれば、感じずに居られない事だ。そして感謝なのだ。自然の壯大と美と、力と、恵みとが我々に與へられた最大の感謝なのだ。

自分達はその一本の野菊を折り取つたとする。その時野菊は決して大きな調和から離れ去つてはゐない。繋がりに切れては居ない。やつぱり手にあつたまま大きな調和の中に「美」として輝く、そして人間の中に潜んでゐる「美」を引き出す。所が人間は誰でも「美」を感じる事が不幸にして出来ない。美しいといふ事は感じる。がそれは極めてほんやりしたものだ。外面に觸れて消えて行く單なる感覺到過ぎない。生活には何等の影響もなく。

現今の小學校の教師に「美」を本當に感じる事が出来る人間は何人ゐる事だらう。

これは大體師範教育といふ不徹底極まる、誤つた教育が及ぼした影響ではあるが、然し必しも、そう許りは云へない。善い素質は犯し切れるものではないと信じるからだ。若し誰か「美」を感じる事、美を愛することが教育者にとつて何等必要のない事であつて、それ等は藝術家に委せて置けといふ者があつたらそれはあまりに自己を侮辱した言葉だ。眞、善、美に對しての信仰と愛とは如何なる人にとつても不必要だといふ事はない。誠に藝術に深く關係のある、といふよりは寧ろ教育は一つ藝術だとさへ云はれる時代に、教育者は尙更眞剣な態度でそれに對さなければならぬ事は當然だ。美を感じる事の出來ぬ教師は教育者として資格が無いと云つても過言ではあるまい。美を無視し殺すことが人間の芽生へを摘みとる非常な罪惡であるからだ。然し美の本質にふれる事の出來ぬ、概念で美を知つてゐる人間も五十歩百歩だ。所が今の教育社會には、「美」を發見しやうとするどころ

でなく、子供等から醜を採し出す事だけを仕事の様で心得てゐる者が随分多い。無理解な教師が、叱り飛ばす事の中に、どれだけ美が含まれ溢れてゐる事だらう。自由さを多分に持つ子供等は、教師の理解の出来ぬ埒外に含み出す事が極めて多い。規律を守れと云ふか、「禮儀を主んせよ」といふ型通りには子供は生活し得ない。然し小柄巧な子供は其型を守つてゐる様に見える。その種類の子供等は教師から品行方正といふ稱號を受け模範兒童と推稱される。所が家庭で自由に自由にしてゐる子供はどうかせば學校でも教師の拵へた埒外に出る事が多い。随つて成績はいゝのですが、どうも品行がよくなくてといふ事になる。そうして子供から、所かまはず飛び出して出て来る純粹さが教師には氣に入らぬのだ。こいふよりは寧ろ理解が出来まいのだ。ぼつり／＼と生れて来るひらめきが解らないのだ。斯くして子供の世界は次第々々に浸飾されて行く。誰れが之れを悲惨な

事實でないといひ得やう。

要するに教育者に正しい生活がないからだ。何も解らないからだ。生活の無い者が、確信のある事が出来ないのはあまりに解り過ぎてゐる事だ。教育が死んだものとなり、邪道に這入つて行くのは至當な事だと云はなければならぬ。

生活が無いといふ事は實に恐ろしい事だ。味を失つた鹽だ。否それ以上だ。一つの毒だ、偽を生む可憎性を持つた無は怖ろしい。

生活の無いものは生存がない。従つて肯定も否定もない。一だけ與へられるとそれは何等の變化もなく一としてその人の中に保たれる。二を引き出す前提となる事も、三を感じる基調ともならない。従つて一は生きては居ない。單なるミイラたるに過ぎない。

教育者を此の様な偶像、乃至不能者にした一つの原因には明らかに所謂

小學教師の手記

生活問題がある。食ふ事の問題がある。自分の口を糊する事、妻を養ふ事や子供を育てる事の重みの爲めに彼等は押し潰されてしまったのだ。苦しむには随分苦しんでゐる。眞に正しく生きる事の爲めでなく、如何にすれば完全にその日を過す事が出来るか、死なずにゐるにいかといふ問題の爲めに。従つて（この言葉は少し不適當ではあるが）内的な最も大切な要求は消えてしまつた。丁度鹽が周圍から水分を吸収して自分の味を失つてしまつた様に。それは明らかに胃潰である。がかくならしめた者に大部分の罪があると云はなければならぬ。

人は教育は天職だといふ。儘かに教育は最も尊い仕事のひとつだ。明らかに天職だ。然し今の教育者からは此の「天職」が消え去つてゐる。勿論社會の人は天職だとは思つてゐない。若しこれがあるとすれば、これは無理強いをする一つのこじつけに過ぎない。その言葉は空虚だ。全く皮相な言

葉だ。何故ならその人達は果して教育が天職だといふ事がはつきり判つてゐ、仕事に對して本當に尊敬を拂つてゐないからだ。若し拂つてゐるといふ人があつたらそれはやつぱり嘸言だ。尊敬を持つてゐたなら、その天職に従ふ人に對して、相當の、少くとも日常生活に對しての安心を與へ、その方面の事は一切念頭に置く事なしにその仕事に従ふ事を希はなければならぬ筈だ。所がそれが全然出来てゐない。教育者に教育の事よりも米櫃の方に心を使はせてゐる明らかに侮辱であり誤りである。最近に至つて少し社會の自覺のある人々が待遇問題を云爲する様に至つたのであるが、それさへも、教師が同盟休校するといふ様な不隱な動靜が喚起した事に過ぎない。その時要路の人が、教育者が、天職に従事してゐる者が生活問題を提げて立つとは怪しからんといつて怒つた人がある相だ。聞いてあきれ他ない。自分を責めなければならぬ所を、他方即教育者をおごしつける

とは全く反対な事だ。がそんな事で時があく様に今生活問題に餘裕がないその日を送れるか、送れぬかの問題なのだから。他の職業に轉じる者があつたのを、あまり大きな口を開いて兎や角云ふ事が出来ない筈だ。物價は暴騰する。俸給はそれに伴はなければそこに如何なる事が發生するかは實に明瞭過ぎる事だ。物質で初まつた事が、物質以上の所迄行つて終ふ恐ろしい結果を生む事は大低見當のつく事だ。それを平然としてゐるのはまだ眞に教育なるものが「天職」迄ひきあがつて各々の頭にはいつてゐないからだ。勿論考へる事は深く考へ、憂へてゐてもどうにもする事が出来ない人は澤山居る事は知つてゐるが。然し此頃、教育の爲めに本當に心配して呉れる人がわりに多く出て來始めた事は嬉しい事だ。

が一方の教育者の方も此の儘ではならない時が來つゝある。生活の壓迫の爲めに、勉強が出來なかつたといふ辯解は立たなくなる。勿論眞にいゝ

素質を持つた人であるならば、幾等生活の壓迫を受けても、決して大切なものから遠ざかり、内生活が空虚になる胃瀆から免れ得る者である事を自分は信じる。従つて日常生活の逼迫といふ事は不能者になつた、生活がなくなつた全部の辯解にはならない。結局、老廢物はごん／＼流れ去り新鮮な善い人が多くなつて來なければ駄目だ。同時に、教育を理解する人が多く出て來なければ、現状の邪道にはいつた、行き詰つた教育界は救はれない、可憐な何千萬の子供達は救はれない。

×月×日。

夜湯屋で自分の受持ちのKといふ低能な部類にはいる子供が、父らしい人で行つてゐた。向ふでは見つけない。自分は風呂の隅から二人の様子をじつと眺めてゐた。

Kといふ子は、多くの時は鼻を垂らしてぼんやりしてゐる頭でつかちな

子だ。眼球が眼ぶたに覆はれてゐて、一寸暗い所だけにだけ住んでゐる土鼠と
いう感じのする子だ。正直に云ふと自分は受持ちでありながら、その子の
存在を認めてはゐない。それはこの時實に明瞭に感じた事だのだが。

その子の親は労働者らしい人だ。陽にやけた。陰惨な影さへ顔に浮んで
ゐる様に思はれた。恐らくこの人と道で遇つたら、自分は決して好感を持
てぬ人に違ひない。

その親がKの背中を流し始めた。自分は然つてそれを見つめてゐた。

「あゝ悪かつた。」自分はふと思つた。親子の嚴然とした立派な繋がりに
打たれた。眼の前に立ち塞がった様に思はれるその大きな光景に壓迫され
た。親は一生懸命に子の膚を磨く。子は眼を瞑つて顎を下げてゐる。自分
はKが持つてゐるあゝした世界を忘れてゐたのだ。

自分は恥しくなつた。

學校に来て、Kの前に展げられた世界は決して彼に住心地のいゝもので
はなかつたに違ひない。彼は全く縁のない他人の世界に投げやりにされて
ゐたのだ。そしてなげやりにしたのは自分なのだ。無視したのは自分なの
だ。

「低能兒」それは多くの教師から無視され嫌悪される性質を持つてゐる。
が誰も好んで低能兒を生んだ者はない。彼等は誰の前にも別に侮蔑される
べき筈の者でない。然し世の中の事實は高能兒は低能兒を侮蔑する。「あ
の低能兒が」と云ふ。高能兒は低能兒に對して優越権を感じるのも一方實
に當然の事なのだ。殊に低能なくせに、その自覺の無い者に對しては尙更
だ。

低能兒を保護しやうとする者は「低能兒救濟」を呼ぶ。然し低能兒は低
能兒だけの能率しか與へられてゐない。彼等は所謂大人の救濟に對しては

合點がいかないのだ。今の救済なるものは嚴密に云へば誤りなのだ。咀嚼の出來ぬ頭に無理に或程度迄つみ込まれてもそれはそれ以上に進展すべきものではない。進展のない物は無いと同じだ。が所謂救済はそれ以上に出る事ではない。或程度迄物を覺えさせる事が即ち救済なのだ。高能な者の出來る事を漸く難儀して覺えさせ、そこに深い侮辱を感じさせ能力の足りない事を知らせるのだ。一種の生の否定を教へるのだ。然し本當の救済は決してその様に上つ面に眼で見える事で出來得るものではない。

低能兒はいくら低能兒にしる、生きてゐる理由のある世界を持つてゐる明瞭に意識してゐないにしろ、若しそこを誰か々勝手に踏み躪つた場合それを非常に嫌ふ事によつて明瞭に判る。

本當の意味の救済はその世界を保護してやり、導いてやる事にある。時にはそれが恐ろしい程の進展を見せる事がある。若し彼等は如何なる時機

にか或罪惡に近づく事があるとする。それが非常に恐ろしい結果になる事は類の少くない事實が證明してゐるではないか。

低能兒は決して在來の救済を願つてはゐまい。もつと本當の意味の救済を願つてゐるのだ。

然し恥しい事に、自分は無意識に彼等の世界を踏み荒して了ふ。高能兒を取扱ふてゐて、急に方面をかへて彼等の世界に靜かに歩みよる事は凡ね至難の事だ。餘程用意した積りでも心が遂奇立つて終ふ。「低能兒はどうせ凡人以上に出ないのだから、それよりは高能兒を自由に伸ばして行きたい」といふ考へが先きに立つて終ふ。そして今夜の様な場合に遭遇した時、自分は恥かしくなり悪かつたと悔む。「彼等のあつた世界を、自分は學校の中に作る事が出來ないのか」と思ふ。「否出來ない筈がない」と考へる。が又、「とてもあの神秘な所迄はいつて行けない」といふ氣が一方にする。

そして俺はやつぱり他人だぞといふ事を思つてぞつとする。
兎に角低能児は低能児として救はなければ嘘だ。低能児を凡人或はそれ以上として、つまり低能児以上の者として救はうとするから不可なのだ。然しかういふ事を云ふ人があるかとも思ふ。「低能児は決して低能児以上として救へない者ではない。現に自分は低能児を優等児に近い所迄救ふ事が出来た」と。

この様な事を眞面目に云ふ者があれば滑稽過ぎる事だ。それは教師が低能児を作つたのを又元に戻した迄の事だ。別に不思議な事ではない。實に當然な事だ。自分の云ふのはこんな不自然な人工的な低能児を云ふのではない。が今の學校には低能児が無數に製造されてゐる。どこにもごろ／＼してゐる。それは教師が作る事云ふ迄も無い。時には教師の感情がつくる即ち毛嫌ひからその子供を內的に排斥して終ふ。子供は急に勝手が違ひ世

界が違ひ過ぎてそこに破綻を生じて終ふ。そして人工的な低能児が製造される。時には又、教師の低能がその子供の外面を走つてゐる粗暴とか不儀とか不注意とか云ふ事だけに眼が止つて、その内面にひらめいてゐる物を見る事が出来ぬ爲めに低能児が製造される。それは教師の生活の問題だ。自分は教師の資格は別に云ふ機會あつたら書く。そして元の本當の低能児に戻る。

以上の様な關係から、自分は如何しても低能児は低能児として救はなければ嘘だといふ事を明瞭に云はなければならぬ。

自分はどうしても低能児を分離する必要がある事を信じる。或は特別學級を編制する事に依つて、益々侮辱を感じさせ、こじけさせるではないかと云ふ人があるかも知れない。それも慥かに一つの問題であるに相違ない然しそれも混合して置いて時々刻々感じさせて置くよりはまだ増した。そ

して教師も本當に深い理解のある者であれば充分低能児が生かされる事を信じる。自分は幸、友人のKが或點迄成功してゐる事を知つてゐる。そうした事によつて、低能児は低能児として立派に救はれる。

自分達は他人の世界を踏み躪る事を決して許されてない。純い神経の所有者であり、或要求のもとに生きてゐる人間にはそれが判り過ぎてゐる事だ。

低能児の世界は決してこの世から離れ去つたものではない。そこにも神秘的な意義が存在する。

低能児にしろ、親と子の間にある美しい繋がりである。そして此の世に生きてゐる一人なのだ。それが或點迄生かされるのであればならない。

低能児！それは決してこの世以外のものではない。
×月×日。

生徒の有志の者との前からの約束の通り花月園へ行く。

男の子若干名と女の子若干名とだ。約束の時間にならぬ前にKいふ子が洋服を着て飛んで來た。水筒をきげたり、又靴には一杯菓子や果物を詰め込んでゐるらしい。

「先生まだですか」
子供は自分の顔を見るや否や、「お早う」の代りにかういつた。

「まだ早いよ、」皆がまだ來ないから少し待つてゐらつしやい。」
Kは少し不服らしい顔をしながらも靴の紐をほごき始めた。小鳥の様な浮々しさを以て。それから又しつかり充滿し切つてゐる風船玉の口をほごく様な未練さを以て。

その中にN君が室から出て來て突ひながら色々話し始めた。自分はどつかにひつかつてゐる様な氣持ちがしてゐる仕事の残りを片附ける爲めに

室に歸つた。

自分が又室から出た時には子供等は全部揃つてゐた。そしてN君を取り圍んで何か話しながら靴や布呂敷を開いて何かを食べてゐた。

家を出たのは十時だつた。N君も一所だ。

電車の停留場に行く中子供等は通一杯に駆け廻りながら自分等の後になつたり、先になつたりして歩いた。「幸福そのものだ」と自分は思つた。「巢立つた雛鳥の様だ」N迄は笑ひながら云つた。

「本當に私達嬉しいんですよ」Fといふ女の子が自分とNの中に割り込んで、バネの様に身體を動かしながら云つた。

「ね、ね」Fは仲間にならぬ頭をまげて同感を求める様に云つた。男の子供等はいつの間にかすつと先の方を歩いてゐた。

自分の心は微笑まずには居られなかつた。「こんな子供等を學校で無理に

抑へつけて、色々な修身の徳目を並べたり、大人にだけ通ずる理屈をこね廻すといふのは随分可憐な氣がするね」とNは突然云つた。

「全くね。自分は云つた。

人形を弄び、お母さんごつこをしたりしてゐる子供等に向つて、それ等の子供の世界とは全く交渉な角の一杯ある不消化な徳目や理屈をいい加減に並べたてる事はどれだけいゝ事だらう。自分達の頭に小學校時代の賜物として残つてゐる事はどんな事であるか、考へる必要がある。それから又現在を考へてもいい。自分の世界にびつたりした交渉のないものは直きに難散して了ふではないか。況して、自分の世界を擁護する事最も甚だしい子供に於ては猶更である。自分の頭に遺つてゐるものは小學校で教はつた筈である抽象的な事では決してない。英雄譚であり、獨逸童話集の話だ。子供の向上しやうと無意識に努力してゐる世界に對して、暗示を與へ

啓發して行くのは決して教科書に羅列されてゐる様な教材ではない。

子供等が悪趣味な豆本的な讀物をこつそりと懐の中に隠して、教師の眼をぬすみ、父母の眼をかすめてお使の途中などで讀んで歩くのは、學校で彼等が救はれてゐない立派な證據だ。彼等の世界に對して交渉のない學校に飽き／＼してゐる子供は自分から自分の空想を満足させる様な方法をとる。學校で、子供の獨特の世界をよく呑み込んでゐてそれを導く事に務めるのが、本當であり、それを否定してそしてその儘放り出して置くのが一種の怖ろしい罪惡だとも云へる。

彼等は新鮮さを持つて居ない學校にあき／＼してゐる。彼等は只義務として行くに止つてゐる。學校の門を飛び出した時の子供がそれを明瞭に語つてゐる。彼等は門を出て、始めて蘇生つた様な顔をする。そしてその時の「先生さよなら」が如何に元氣よく響くかを聞けばわかる。又たまに學

校に残つて學校園の手入れをしたり、夢中になつて遊んでゐたりする子供がある。それは不規律だ。ごこの組の生徒かといふ校長の厳しいお言葉がある。かくして子供は、「學校といふものは、自分達の世界の一部ではない」ことを感じ、あきらめるより他ないのである。

彼等の今日の喜び方！それはあらゆる束縛から通れた喜びなのだ。かうした時にだけ彼等は本當の自然の子に歸る事が出来る。彼等を巡査の様な目で見てゐるものもなければ窮屈極まる約束もない。只彼等の上にあるものは、明るい太陽と、微笑んでじつと見つめてゐる自分達の心だけだ。彼は全くすべてを委せ切つた安心以外に何もないのだ。「いざ」といふ時にはどんな事でもして救つて呉れる自分達の事、彼等は信じ切つてゐる。電車の中は日曜の爲めに込み合つてゐた。お父さんに連れられた子供、お母さんに兄さんに連れられた子供、そうした彼等の仲間がそこにもこゝ

にもゐた。お父さんの腕にぶらんこしたりなどして。

自分達はごうにかかうにかして長い間に子供等を皆腰かけさせてしまつた。それから自分はずり皮につかまりながらポケットに入れて来た本を取り出して讀んだ。本を讀みながらも自分は時々子供の方を見た。彼等は決してちつとして居なかつた。窓から外を覗いたり、靴の口を開いたり締めたりしてゐた。たまには持つて来たスケッチブックを開いて見たり、「赤い鳥」などを讀んでゐる者もあつた。

「仲々うまく讀めないね、今日は。まだ二頁しか讀めない」一時間以上も電車に乗つてもう終點に近づいた時Nは云つた。その時自分も十頁許りしか讀んでゐなかつた。一人で乗ると少くも四十頁か五十頁は讀むのだが。品川で下りて京濱電車に乗り替へた時は割にゆつくりする事が出来た。今度は自分達も腰かける事が出来た。立つてゐる事に慣れてゐるとは云へ、

人に押され〜一時間以上も立つてゐたのだから、相當に腰がだるくなつてゐた。

神奈川でおりて、總持寺、それから花月園といふ順序で歩いて行つた。

子供等は東京を出る時の子供等であつた。彼等のあまり見た事のないものに出遇ふ度に彼等は無上に嬉しがつて、子供一流の批評をした。萱の穂でも東京の真中に育つた子供等には親しい珍らしものに相違なかつた。彼等は自分達の繋がつてゐるものを其處にも此處にも見出した。

神奈川の停留場から跟いて来た一匹の小犬があつた。その犬が自分達の先のなつたり、後になつたりして絶えず駆け廻つて子供等を喜ばした。時には大切に抱へてゐる女の子の布呂敷をひつぱつたり、男の子の靴を嗅いだりした。その犬には子供等によつてまるいふ名がつけられた。何故ぞういふ名をつけたのか、又いつの間につけたのかも自分は知らなかつた。

その犬は不思議にそのまると呼ばれる事に満足して駆け歩いて、子供等がからかつて投げてやる木の枝や、萱の穂を啣へて嬉しそうに駆け廻つて子供等を喜ばした。「まる、く、く、く。」子供等がひつぱり尻にするので犬はどつちへ行つていゝかわからぬ様に短い頭を上下に振つたり、ひとりでちんちんをしたりした。お愛嬌者のまるは時々はパンのかけらを御馳走になつたり、ビスケットを貰つたりしてお供した。

「このまるはお家が無いのね」

Fといふ女の子が云つた。

「でも随分元氣だね」Nといふ女の子がそう云つた。

「まんまるく肥つてゐるわ。きつとお家があるわ」仲間のIは云ふ。

「でもなんだかあはれつほい眼をしてるではないの」Fは云つた。自分はちらとFの方を見た。或感情が自分の胸を走り過ぎた。彼女は親が神戸に

ゐるので、叔母さんの家にゐる子だ。

「でも嬉しそうね」Nはそう云ひながら握つてゐる萱の穂を一本投げた。まるは早速それをくはへて先の方にゐる男の子の方へ走つて行つた。

「あんまり色々な事を云ふから逃げちまつたわ」さつきから黙つてゐるSが云つた。

「あらいやだ」申し合した様に皆そう云つてどつと笑つた。それつきりをの犬が家があるかないかといふ事は問題に上らなくなつた。

總持寺を一廻りして小高い丘から海の方を眺め一休みしてから花月園の方へ行つた。その時はまるはもう失敬してゐなくなつてゐた。

傘の様な建方をした東家を見つけた時男の子のMが云つた。

「やあうまくやつてるね。雨の降る時ちよつと借りて持つて歩くの大抵の雨は大丈夫だね」

『だが重くて持てないよ。』Aは正直にそう云つた。
『その時は辨慶でも頼んでくるさわけがないさ』Bは云つた。皆がどつと笑つた。花月園にはいつてからは、子供等は皆別れ／＼になつて好きな方へ走つて行つた。象の迂り臺を上つたり、ブランコをしたり、遊動園木を渡つたり、又或者は池へ行つてボートを借りて漕いだりした。
自分とNはあつちこつちをぶら／＼歩いた。子供の成績品の展覧會にはいつて、一見上手らしく見える大人が子供の名をつかつて書いた書などを見たりした。活動寫眞館の前を通つた時、『あゝつまらない／＼』と云つてAが出て来た。一寸覗いて見たらありふれた喜劇が映されてゐた。なる程東京の子供にはつまらないに違ひないと思つてそこを出た時、Fが走つて来た。『先生木馬は面白いですよ』笑ひながらたゞそれだけ報告して飛ぶ様にしてどこかへ行つてしまつた。自分等は笑つてしまつた。

花月園で四時間許り遊んでから皆を集めて歸る仕度をした。
自分がこの様に幸福に一日を過す事が出来た事は何といふ喜びだつたらう。あゝ子供の純粹な心と直きに觸れ合ふ喜びよ。それは永久に教育者に許された幸福である。
×月×日。
十五分休みに用事があつて職員室にはいつてゐると息をはすませて受持の辻と堀井とがはいつて来た。
『先生』彼等はだしぬけにそう云つてドアもしめずに走り寄つた。
『どうしたんです』自分は少し不安になりながら云つた。
『今ね。今ね。泉さんと安田さんが喧嘩して居るんです。辻は眼を光らせながら云つた。
『いくら止めても聴かないんです。』と堀井が附け加へた。

小學教師の手記

「先生直ぐ来て下さい」そう云つて二人は又駈けて出て行つた。

自分はどう／＼やつたなと思つた。或はそんな事があるかも知れない事を内々豫期はしてゐたが油断してゐたのだ。先きの時間に算術の問題をやつた時、泉が「安田さんが出来ないのを今急に直して手を上げたんです。」と席に突つ立つて呼んだ。自分は黙つてゐた。何故なら、自分は泉と安田のごつちの心にも賛成が出来なかつたからだ。一人は他人を陥れて自分だけいゝ子にならうとした。それから一人は自分の否をかくしたのだ。その時間の終りにも二人は子供らしい反目をしてゐる事に気が附いたのだつたが、大した事にはならないし、又うつかり口を出して二人の間のひびを大きくしても不可ないと思ひ、一方にはしつかりした級長の藤井が居るので安心してゐた。然し子供に知らされては行かないわけに行かなかつた。外では受持ちの子供が二つに分れて一人宛圍んで出すまいとしてゐた。

丈の低い泉は圍まれた中から爪立てをして安田の方を覗いてゐた。一方の安田は圍の中から泉の方を向いてじつとにらみつけてゐた。安田の顔は青くなつて緊張してゐた。そして口を眞一文字に結んでゐた。時々圍の者の隙を見て、飛び出さうとしてゐた。

自分が近よつた時、泉は、少しはひがむ様に涙の少しにちんだ眼をして自分の方を見た。安田は何物にも譲らない決心を示す様に、きつと自分の方を見た。

「一體どうしたんだ」自分は誰にともなく聞いた。

「安田さんと泉さんが教室を出る時、喧嘩しやうと云つて約束して、どう／＼喧嘩して終つたんです」村井がそう報告した。級長の藤村は不安そうにして自分の方へやつて来た。

「どうしても聞かないんです」そう云つて二人の方を見た。

「泉と安田、一寸待ちなさい。喧嘩しなければならぬ事があるならしても仕方がない。然し一應話す事があるから次の時間迄待つてゐらつしやい。少し心持ちを落付けてね」

子供等は圍を解いた。二人は喧嘩しやうともせずに各々友人に連れられて遊び始めた。自分は少し闇い氣持ちになりながら職員室へ歸つた。

自分は反省せずには居られなかつた。何故あの子供等があんな荒んだ氣持ちになつて終つたかに就て。少くとも受持ちの生徒に對しては全責任を負ふてゐる自分として、考へなければならなかつたのだ。

自分の氣持ちは時々荒む。それを落付けやうと努力してゐる事は事實だ。然し公憤とでも云ふべきものが、時々自分を荒まして終ふ。自分はそれが無言の中に、而かも直接に生徒に響く事を恐れては居る。然し悲しい事に自分は子供に對して常に敬虔になり平靜に暖かな心を持ち續ける事が出来

ない。自分は自分に對して忠實でありたいといふ希求は、子供の前に自分を偽る事を妨げる。自分に忠實でありたいといふ希求、それは決して所謂利己主義では決してない。自己に忠實になり得ない者は必ずや他に對して忠實になり得ない。自己を偽る事の出来る者、それが聽て他を偽る者である。大袈裟に聞えるかも知れないが、自分は大なる者の意志——それが眞理といつても神といつてもいい——前に自分を捧げ度いと思つてゐる。そして自分は時々祈りの氣持ちになる。が恥しい事に、それが何時でもではない。ほんの時々なのだ。多くの時間は自分の心は雜踏に迷ひ込んだ幼児の様にならうとする事は、如何にしても自分を希求する所へ近づげやうかとする反省であり、努力である事に他ならない。それがやがて教育の中に深く入り込む事だと自分は信じる。自己に忠實である事が、他を顧みないとい

ふ事になるのとは全然意味が違ふ。

自分がかうした不安な状態の時出来るだけ奔放に行かうとする感情を抑制はする。然しそれが決して眞の平静には歸らない。その様な状態で授業をしてゐる時、子供は先生の胸の中にかくされてゐる者を感じずには居ない。直覺で先生の荒み、不安を感じて了ふ。恰度幼児が抱かれてゐる母の悲しみ、或は歡びを肉體的に感じる様に、子供等は先生の胸の中の事を肉體的に感じるのだ。

あゝ何故自分は平和に、本當に隠かに毎日を送り又迎へ、子供等と共に空中を駆け廻る様なうきうきとした喜びの所有者となり得ないだらう。自分は何故人よりも多く暗い所へ突き放されるのだらう。そのくせ自分は光明に向つて、幸福に向つて、人以上の願を持つてゐるのに。——自分はよくそう思ふ。そして子供の顔を見乍ら濟まなくなつて、荒みが自分の中のへ

んなセンチメンタリズムを呼び起す。それが單なるセンチメンタルか如何かは兎に角として、自分は涙がにちみ出る事が珍らしくない。子供に光明を見せやうとし、その方面へ進ませやうとして却つて暗い方へ導くではないか。そういふと自分は怖ろしくなる。

兎に角今度の泉と安田の喧嘩には、自分の此頃の心持ちが影響してゐるに相違ない事は否定出来なかつた。彼等を荒ませた罪は慥かに自分に在る此邊一體のいら／＼したがさつな空氣が不知不識の中に彼等を幾分犯してゐる事も事實なのだ、それを救ふ事が出来ない自分の責任があるのだ。あゝ教育者である事の難さ、そして苦惱。それは決して第三者が簡單に推測する事が出来ない。

次の時間自分は教室にはいつて行つた時、子供等は靜肅にして自分の行くのを待つてゐた。教壇に立つた時自分の心は重苦しいものだった。子供

等は泉と安田に反對しての審判の言葉を眼を輝やかしながら待つてゐた。

「私ばかりいふ童話を讀んだ事があります」

自分は暫く子供等を見廻してから云つた。安田の眼が、著しく光つてゐるのがその時自分の心を射た。一方の泉は少し下を向く様にしながらやつぱり自分の方を見詰めてゐた。自分は續けた。

「昔或時神様が雲の切間から下界の様子を御覧になつてゐました。丁度その下は地獄でした。地獄の泥池の中には澤山の罪を犯した者共が池から這ひ上らう／＼としてあせりながら泳ぎ廻つてゐました。然しどうしても這ひ上る事が出来なかつたのです。それでその人々がお互つかまひ合つたり自分が溺れ度くない爲めに他の者の上にのしかつたりして喘ぎながら泳ぎ廻つてゐるのでした。神様は、ちつとそれを御覧になりました。その時神様の眼に映つた一人の子供がありました。その子供が或る罪を犯した爲

めにやつぱり地獄の泥池の中に放り込まれたのでした。然し他の大人の罪人に比べるゝと、それは非常に軽いものでした。神様はその子供をお助けにならうと考へました。そして蜘蛛に命じて、糸を泥池の中へお下げになりました。美しい蜘蛛の糸は銀の糸にやうに太陽の光に輝やきながら静かに泥池の上へ下げられました。その子供はそれを見つけるや否や喜んでその糸に縋り付きました。そして一生懸命に上り始めました。神様はちつとこれを御覧になつてゐました。その子供は次第々に神様の近へ登つて行きます。もう少しで上り切るといふ時その子供は下の泥池の中を覗いて見ました。所が泥池の中の者共は、子供の上つて来た後から／＼とその糸を上つて来るのを見ました。その子供は慌て、上の方を見ましたら、糸は細くなつて、今にも切れそうになつてゐました。その子供はその時下を向いて「上つちや不可ない。切れるぞ」そう叫ばうとしました。然しその子供が

呼び終らぬ中に、その糸はぶつとりと切れてその子供は又元の泥池の中へ落ち込んで終つたといふ事です」

自分がかう云ひ終つて子供等を改めて見廻した。そして附け加へた。

「この話は勿論作り話です。然しその中にはあなた方にとつて大切な事が含まれてゐると思ひます。何故その糸が切れたでせう。」

子供の多くの者は「はい」と云つて手を上げた。その時泉と安田とは顔を見合せてにつこりと笑つてゐた。自分は少しこちつけてゐる自分を不快に思ひながらも云つた。

「よろしい。皆わかりますね。それで私も嬉しいのです。それ以外に云ふ事はありません。それがわかれば澤山です。」

自分はそう云つてその時間の授業を始めた。少しこちつけすぎたといふいやな氣もしないでなかつたが、何となく自分の心は和いだ。六十の子供

と自分が只一處で結合し得た幸福さを自分は熟々感じた。そして念じた。

「どうぞ私の何にも換へ難いこの大切な子供達をお守り下さい。」と。

自分は念の爲めに、次の休み時間それとなく注意してゐた。泉と安田は隅の方で何か話し合つて笑つてゐた。それを見た自分の心も同時に微笑んだ。

自分は我が子供等の爲めに願はざるを得ない。

「足りないとは云へ、自分の眞面目な心が子供等の心は或芽生えを少しでも安全に育てる事の出来ませう様に。それから子供等は暗い心を起さず天真に幸福に生々と育つて行く事が出来ませう様に。」

×月×日。

自分は友からAの話聞かされてからその事が頭にこびりついて離れな

い。そしてそれを基點として色々な事が考へられてならない。

親の無い子供！そこには怖ろしい闇がある。連命のひいはそこから始まる。父の無い子供、それから母の無い子供、又両親の無い孤兒。

自分は思ひ起さずには居られない。故郷の學校に居た頃の少女等の事を、そして可憐な少女、牧子と君子との爲めに祈りを捧げずには居られない。特殊な連命の上に育つてゐる二人の少女は恐らく永久に自分の心から消え失せる事はないであらう。

夜になると自分の所へ集つて来る五六人の少女達があつた。

その少女達は何れも春になれば女學校の試験を受ける希望で一抔であつた。若い天使の様な少女達の胸の中には、銀製の櫻の花の徽章をつけた巾の廣いお茶の水のバンドに似たバンドをしめて勇しく歩いてゐる罪の無い姿があつた。

彼等は一生涯懸命になつて豫備の勉強をした。自分が歸りの遅い時は、勝手に室に這入つて火をおこし、本を擲つて勉強し始めてゐる事もあつた。然し彼等は飽迄も天使である。彼等の中の幻は現實から抜け出して飛びまわる事も少くはなかつた。時には自分の居る十疊の室がゆれる位駆け廻る事もあつた。自分はそれを咎める氣にはなれなかつた。幼児を背負つた母の感ずる様な喜びと満足とをさへ感じた。彼等と十も、年齢の違つてゐない自分は兄妹の様な親しさ、一方には子をあやす母の様な慈しみとを以て子供等に接した。

少女達は全く幸福そのものだつた。

時には「私はいれないに決つてゐるわ。」などと頭を曲げる子もあつた。そんな事が一層彼等をいちらしい可愛い者にした。又他の人々が家庭の事情などで入學する事が出来ないのに、自分達はそれが許されてゐるのだから

どうにかして入學しなければ。」といふ考へが彼等を元氣づけた。

「うんと勉強しなさい。大丈夫はいれますよ。」

自分はそう云つて勵ました。

然し自分がかう云ひながらも或二三の成績のよくない者に向つてはかなり不安を感せずには居られなかつた。

かうした數名の少女達の中に君子といふ子と牧子といふ子がゐた。自分はその何れもが入學する事が出来るに相違ない事を信じてゐた。同時に入學する事を祈つてゐた。

二人の子供はごつちも非常に善い性質を持つてゐた。殊に君子の方は學校でも皆から尊敬され愛されてゐた。

自分はふとした機會にその二人が公然といふ事の出来ない、然し立派な姉妹だといふ事を知つた。

自分は前からその二人にごつかに共通な感じは認めてゐたが、二人がそういう關係だといふ事は夢にも知らなかつた。想像した事も無かつた。二人は善い性質の中でもそれ／＼違つた所があり、又顔もかなり異なつてゐるのでそれが決して無理な事ではなかつた。

自分は始めに、友人からこれを聞かされた時、むきになつて否定した。然しそれが確かである事を知つた時、自分は大きな溜息を吐き涙さへも浮べた。そして他人事でない苦しさを感じた。

何といふ運命の惡戯であらう？！

同じ父を持ち、姉であり、妹である様に決定されて居ながら異つた母に宿り、お互全く知らぬ様に他人として育たなければならぬといふのは何といふ事だらう。多くの姉と妹は幸福に手を取り合ひ笑ひ合つて、限定された場所といふものを持たずに愉快に歩き廻る事が出来るのに、一方は公然

と向ひ合つて手を握り合ふ事さへ出来ず、遠くからこつそりと抱き合はうとあせつてゐるのだ。お互に語を交はし乍らも、全く他人の様に、そしらぬ顔して話し合ひそして又別れ去る。

君子はその地方で非常に有力であつた宮野といふ人の次女として生れ、一方の牧子はそれより二ヶ月先きに、同じ宮野の子でありながら違つた母に依つて、人知れずこつそりと産み落された。そして二人は違つた場所で各々育て上げられた。

二人は幸福に何不自由なく育てられた。かうした場合の常として、牧子の方はこつそりと乍らも寧ろ餘計に父に愛されてゐた。愛される點に於ては、決して二人は不足は無かつた。だが、人間の力の届かない所で二人は先天的に非常に相違がある。そして運命の皮肉は、其處に深い暗い隔りを拵へて了ふ。

牧子の母はそれを感じてゐた。感じるにつけても、孤獨生活が鋭くした神経は苛立つ許りであつた。彼女は敵の包圍の中にある様に恐ろしく警戒する心でかけがへのない牧子を抱きしめた。そして一方挑発的な氣持を感しながらたまらなく君子の母が憎しくなる事があつた。彼女の眼には泪が浮ぶ事が珍らしくなかつた。

牧子は次第に物心がつくにつれて、母の膝に抱かれて居りながら眼に浮んでゐる泪をこつそりと眺めては、泪のそる本能的な不安を感じ出した。そんな時には母は牧子をぎつしりと抱きしめて頬づりをした。

二人が小學校へ通ふ様になつた時は、二人は同じ組に編入された。勿論學校ではそんな事を知つてゐたのでは無かつた。全く二人の運命には無意識に取扱はれたのであつたが見えざるものゝ配慮はかうした所にも働いてゐたのである。

二人の母は始めの中時々學校で一緒になつた。二人は知つて居ながら知らぬ振りをしてゐた。

子供の送り迎へが要らぬ時になつても、牧子の母はこつそりと學校へ行つて様子を見た。そして時々君子と牧子とが仲好く遊んでゐるのを見た。千人以上もゐる中で、何故あゝして君子と遊ばなければならぬのかと思ふと、彼女の心は苛立ちそして、侮辱をさへ感じた。然し二人は全く幸福そうに覺えない手つきで繕つきなどをしてゐるのを見ると、自分の邪慳な心を叱りつけ、そして恥ぢながら黙つてそれを見つめてゐた。「あの二人は生れ落ちる前にもう結び付けられてゐたのだ。」と思ふとたまらない苦しさにせめられた。

牧子が君子と共に優等で二年生に上つた春に、彼女は遂に死んで終つた急性の肺炎で。

以上書いた中彼女に關する分は彼女が死ぬ前に、非常に親密な友に打ち開けたのが又二三の人々に傳つてゐるのを、自分は聞いたのだ。

牧子はその後料理店をしてゐる叔母の所へ引きとられた。叔母の家には家督が無かつたので、牧子に家を繼がせる爲めに。それから又世の中の淋しさを見せられる爲めに。

その翌年二人の子供等の父が死んだ。最も大切な二人の子供の繼ぎ目は全く斷ち切られて終つた。若し父が死ぬ前に、一度牧子が正しい自分の子だと云ふ事が出来たならば、二人は公然と手を握り合ふ事の出来る姉妹だつたのだ。縦令一方の者から嘲笑は免れないとしても、それを超した歡びが得られたに違ひない。然し父はそれを云ひ兼ねて死んで終つた。そして二人は永久に他人として遺された。

かうした事實を知つてからは、自分は一層二人を愛す様になつた。殊に

牧子に對しては深い同情心を呼び起した。

此の二人の顔はいつでも自分を泣ぐました。そして、「かうしては居られない。どうかしてやらなければ。」といふ氣がした。然し自分に可能な事は何一つ無かつたのだ。自分は苛々しながらもどうする事も出来なかつた。人の力で爲される以上の事には自分は全く無力なのだ。

自分は二人がお互かうした關係に在るのだといふ事を知る時を恐れた。それは必ずあるのだと思ふとたまらない氣がした。自分は曾て、一人子である事から、私生兒では無いかと疑つた事があつた。そして重い物で壓しつけられる様に苦しかつた事がある。それは私の神經過敏から何かの暗示に依つて起つた悶へであつた。

事實、自分には父があり、母があつた。當然自分は二人の子と考へるのに、何の躊躇も要らぬ事であつたのに。

然し牧子は——牧子には母があるが父といふ者を表向き持つてゐない。其處に起る疑惑から悶へ。そして君子と姉妹である事を知る苦しみは必ず一度は起らなければならぬ苦しみのだ。許りでなく、一度起つて、あとは永久に消え失せる事が出来ぬものなのだ。

自分は二人の前でこつそりと、それを何等かの方法かで、全く苦しさを生じぬ様に話してやらうか、とも思つて見た。だがそれも私にとつては恐ろし過ぎる事であつた。許りでなく不可能な事であつた。

或晩だつた。いつもの様に、少女達は勉強してしまつてから色々な雑談を始めて笑ひ合つてゐた。ふと君子が沈んだ調子で云つた。

「お母さんが風邪をひいてお休みになつてゐるから、私少し早くお先きにするわ。」

そして道具を揃へ始めた。皆の聲が急になくなつた時に、君子は又云つ

た。

「お母さんがお死になるかも知れないわ。お年をとつてゐらつしやるから。……いゝわ。その時は牧ちゃん御家へ行つて御飯焚きでもさせて頂くから。ね牧子さん。」

「あらいやだ。私こそ君ちゃんの所で働かして貰ひたいと思つてゐるのよ。」と牧子はすかさず云つた。

他の少女達はこの不思議な會話を黙つて聞いてゐた。

自分はずつとした。若しか二人は前から知つてゐるのではないかしら。自分にはたまらない気がした。この二人の話は何も知らぬ同志が話す事だとはどうしても思はれなかつた。その後、二人は前から知つてゐるのだといふ事を知つた。

それからは自分には二人が心から愛し合ひ牽き付けられ合ひ乍ら、正面

から姉と云ひ、妹と呼んで、手を握り合ふ事が出来ずに、それで居て愛し合はずには居られないのだといふ事を餘計に感じる様になつた。そして自分の不安は大きくなつた。

子供には愛して呉れる者が必要であると同時に、自分から愛する者を需める。前者は親の留守の間の焦燥となり、後者は玩具に依つて満される。その子が人形を大切に愛す事に母性たるべき彼等の本能の無意識な、然し嚴肅な現れを見る。女の子にとつて、愛して呉れる者は母であり、愛する者は人形である。自分を愛して呉れる者が居らぬ間、彼等は自分が愛する事に依つてその時間を繋ぐ。

然し牧子は人形を愛してすむ年齢は過ぎてゐた。そして、その力とも云ふべきものは、只一つの繋がりである君子に向けられた。が勿論この時が始めではなかつた。一年生の頃から、無意識に、お互に牽き合ふものを感

じ乍ら育つて来ては居た。それが一層はつきりと現れたに過ぎない。然しそれも正面からでなく遠廻りして行かなければならなかつた。彼女には、もう少女の多くが持つ恥かしさが眼覺めてゐたのだ。牧子は自分が特に君子を愛さなければならぬ心を人に氣附かれる事を警戒し怖れた。若し君子と二人切りになつたとしても、牧子の口には決してそれが云はれなかつたに違ひない。

一方君子も亦牧子に劣らず牧子を愛した。だが君子とても、それを云ひ得る事では無い。そして二人は如何なる場所、如何なる時間に於ても、表面上に於て、決して乗り超す事の出来ぬ他人なのだ。

それにしろ少女の敏感は、お互の愛を感じ合ひ、纏り合つて生長する。然し二人の間の橋はとれない。そして二人の運命は暗い所で探り合ふ。

二人が何食はぬ顔して仲好く話し合つてゐる時、それが二人にとつて最

も幸福な時なのだ。内から悉皆繋がれ合つた時、言葉以上の者がお互の中に飛び込んで行く。

自分がこれが永久のものであつて欲しいと願はずに居られない。時間がそれから又今後の運命の變動が、二人のこの美しい間を傷つけはしまいかといふ事を怖れる。

自分は何氣なく二人の肩に手をかけて色々な事を話した時、二人は自分の祈を感じたであつたらうか。

それから今迄に二年終つた。彼女等は今女學校の三年になつてゐる。君子の方は級の模範生と云はれてゐるといふ事を聞いた。

夏休みで歸省した時、自分は忘れてゐたその少女等の事を憶ひ出した。そしてそれとなく友人に聞いて見た。

「牧子は何でも女學校を止したといふ事を聞いたがね。そうね。家が家だから藝者にでもなるだらう。何しろ教育はあるし、それに美しいから随分評判がよくなるかも知れないね」

友人はかういつて笑つた。自分も笑つたが苦しかった。

「本當でせうか。本當なら随分かはいそいな事ですね。」

自分の頭の中には眼が心持ち細い、色の白い牧子の顔が判然と浮んだ。それから藝者の装をした格好など。

自分は兎に角その眞疑を確めずには居られない氣持ちになつた。誰にしやうかと思つたが、電話の在る家は君子の家より他なかつた。自分は思ひ切つて君子にそれとなく聞いて見やうと思つた。が扱て電話口に君子が出た時、何と切り出していゝかに迷つた。

「皆さんお變りがありませんか。」そう云つた時あまりに不明な言葉な事

を少しきまり悪く思はざるを得なかつた。

「えゝありがたうございます。皆丈夫です。」自分はその返事を聞いてから

「同級の方にも御變りがありませんか。」と聞いた。

「えゝ皆丈夫であります。」自分はこれだけで言葉を切るわけには行かなかつた。

「それから一寸牧ちゃんを學校を止したといふ事を聞きましたが嘘でせうね。」

「學校に行つて居られますよ。」

自分はそれさへ聞けばよかつた。胸に湧いて來る微笑を生じながら、二言三言話して電話を切つた。

然し間もなく胸の中に冷い不安を生じ出した。それは他でも無い。今後牧子にそういふ境遇上の變化が起るかも知れない事であつた。なほ又、あ

した運命に在る事は、兎もすると自分に對する呪を起し、自棄に陥る憂のある事であつた。

父も無く母も亡い子。油の無くなつた洋燈の様な彼等。その闇黒が如何なるものを産み出すか。考へるだけでも怖ろしい事だ。愛に飢え、果ては食に飢えた、そうした子供等が如何なつて行くのであらうか。そういふ種類の小供達は決してこの世に少いとは云へない。或人がかういふ子供の一を描いてかう書いてゐる。それは自分等に恐ろしい深い感動を呼び起さずには居られないものだ。

「子供達が親に見捨てられた時、どうなり行くかを考へて見給へ。僕はそ
ういふ子供を一人見た事がある。まだ小さな兒であつた。父親が死んだの
で、貧しい人達が慈悲心から拾ひ上げた。然し彼等自身も麵麩に窮してゐ
たのだ。子供は何時も腹を空かしてゐた。丁度冬だつた。子供は泣きもし

なかつた。彼はストロブに寄つて行くが、其處には火も無く、その口に黄
色い土が塗りつけてある許りだ。子供はその土を少し小さな指先で剝がし
て、それを食つてゐた。彼の呼吸は荒く、顔は眞蒼で、足には力がなく、
腹は脹れてゐた。一言も口を利かなかつた。話しかけても返事をしなかつ
た。そして遂に死んだ。或救濟院に連れて行つて死なしたのだ。其處で僕
は子供を見た。僕は當時その救濟院に寄宿して居たんだ。今諸君の中に、
父親たる者があるならば、巖丈な手に子供の小さな手を引いて、日曜日に
散歩するのを楽しみとしてゐる父親たる者があるならば、右の供子は即ち
自分の子供に他ならないと想像して貰ひたい。僕はその憐れな子供の事を
よく覚えてゐる。今も眼に見る様な氣がする。裸のまゝ解剖臺の上に横は
つてゐた時、その肋骨は墓場の草の下の土鰻頭のやうに、皮膚の下に飛び
出してゐた。胃袋の中には泥のやうなものが見出された。統計の示す所に

小學教師の手記

依ると、親の無い子供の死亡率は五十五パーセントに及んでゐる……」

然し牧子は幸に食に飢えずにはすむ、とは云へ彼女はそれだけでは救はれない。魂の動搖、それから絶望。あゝ呪はれた月日に生れた我が牧子よ。自分は御身の運命の上に祈りを捧げる。同時に我が君子の上にも。

×月×日 — 梅子の靈に —

私が始めて貴女を受持つ事になつた時、前の擔任のSといふ女の先生が次の様に紹介されたのでした。

「梅子は非常にいゝ子です。が年が一つ皆より少ないせいもありませうが、ちよつとやんちやな所があります。が成績もよござんすし級長にして置いたのでした。」

これは學期始めたつたので、級長を選ばなければならなかつたので、赴任早々ではあるし、誰が一體相當なのか、一向見當がつかかなかつたので誰

にしたらいゝかを聞いた時の言葉です。

「そうですね。今年には級長としては熊谷がいゝかも知れませぬ。私も又受持つなら、熊谷にしやうと思つてゐたんですが。熊谷の方は成績の上からも品行の上からも少し上な様に思はれますから。」

私は何も考へもなかつたので、兎に角先生の語に従ふ氣になつたのです。然し私は貴女から級長といふ役を奪ふ事が貴女を悲しませはしないだらうかと云ふ事を恐れました。そして級長になつて熊谷を怨む様な事があつて、級は二つに別れたりしては不可ないと思つて心配したのです。然し考へて見ると、貴女を今迄通り級長にして置くといふ事もいゝ事かどうかが、一方では仕事があるのですから。

兎に角私は思ひ切つてS先生の云つた通りにしやうと決心したのです。

そして貴女を呼んでかういつた筈です。

『貴女は今迄級長をしてゐて下さつた相ですが、今年は貴女に自由に勉強して貰ひたいと思ひます。貴女が年が一つ少ないのですし、餘計な仕事をせずに一生懸命勉強して貰つた方が貴女の爲めにもなると思ひますから。それに私としては、級長といふ役は一年毎に別の人にやつて貰はうと思ふのですからね。一寸心配なのが、貴女はそれを思ひなく思つて新しく級長になつた者を怨む様な事があつては困るといふ事です。そんないやな事はないと思ひますが、今度級長になるのは熊谷ですが、新しく級長になるので、色々解らない事もあると思ひますから色々教へてやつて下さい。そして二人で仲よく勉強する様にして下さい。解りましたか。』

その時貴女は二三遍頭を曲げて背いてから友達のある方へ駆け出して行つたのを私は知つてゐます。

私はその後貴女の様子をこつそりと伺つてゐました。そして私は恥ぢなければならなかつたのです。

私がこの前の様な事をいふには、貴女はまだあんまり子供だつたのです。私は大人の神経をかなり加へて話した事に気がついたのです。そして自分のいやな感情を恥しく思つたのです。

然し熊谷の方ではかなりそれを氣にしてゐるのが私の眼に映りました。

熊谷には次の様に云つて置いたのです。

『今度貴女に級長になつて頂く事にしましたから、出来るだけ級の人の事を考へて色々話してやつて下さい。今迄は梅子さんにやつて貰つてゐたのですが、相談して貴女にして貰ふにしました。所で貴女に頭の中に入れて置いて貰ひたいのは、梅子さんと仲よくするといふ事です。級長であつてやめさせられて、或は少しいやな氣がしてゐるかも知れませんが、貴

女の方で決して梅子さんを粗末にしないで、仲よく勉強もし、又遊んで下さい。」

私は貴女方が仲よく遊んでゐるのを見た時非常に嬉しかったです。

が後で貴女のお母さんに遇つた時、流石に自分か少しすまない気がしたのでした。

それは或學校での會の時でした。

お母さんが私の所を尋ねて来てくれてかう云ひました。

「色々家の梅子がお世話になりました。御挨拶に上るのでしたが遂失禮してゐました。何しろあゝいふ腕白者ですから、充分お叱りになつて勉強させる様にして下さる様に御願申します。」

私ははつと思つたのでした。そして何かを心の中に含んでゐる様な氣がしてならなかつたのです。何しろ貴女にとつては何でも無い事でもお母さ

んにとつては、何でも無い事であり得ない事なのです。自分の子供の事を深く考へ、大切にしてゐられる方であればある程さういふ筈ですから「どう致しまして。」と云ひ出しては見だもの、私は何だか氣がひけたのです。そして附け加へました。

「今度梅子さんがしてゐてくれた級長の役を熊谷にやらせる事になつたのですが、それには別に大した理由もありませんが、私としては一年毎に級長を換へたい希望なのですし、又梅子さん自身の事を考へても、級長といふ事はあまりためにもならないかとも思つたのです。何しろ年も一つ若いのですし、なるだけ餘計な仕事を省いてやる方がいゝとも思つたのです。梅子さんはそれを氣にかけてくれては因ると思ひましたが、そんな様子が少しも見えないので喜んでゐます。まあそいふ譯ですから。」

「いゝえ決して御心配下さらぬ様にして頂きます。そんな事はごづちでも

いい事ですから。』

だどへかうした語にしる、かなり小心に氣にかけてゐた私は喜んだのでした。

それから二人は色々な事を話し合つた末私は次の事實を知つたのでした。貴女は現在のお母さんの子供では無い事。それを現在のお母さんが代つて育てゝゐるといふ事、貴女の成長だけをお母さんが楽しみにして一生懸命に育てゝゐるといふ事等でした。私は詳しく知りたい事もあつたのですが、さすが現在のそうした關係にゐるお母さんに向つて色々な事を聞くのも氣がひけたのでよしました。

然し貴女が尋常でない運命のもとにある人であるといふ事は此の時深く私の頭の中に沁み込んだのでした。貴女は時々しかお父ちやんの顔も見ずに、勿論本當のお母さんの顔などは知らずに、現在のお母さんを本當のお

母さんだと信じて安心して育てゝゐるのを思ふと、何となく貴女が憐れに思はれてなりませんでした。私は貴女を見るのに、或心持を交へずに見る事が出来なかつたのです。圓い白い顔の中に細いが輝く眼をうるまして、おさげにした髪、耳のわきに大きなリボンをかけてはね廻つてゐるのが私には淋しい氣がしてならなかつたのです。

私は今でも頭の中にはつきりと浮べる事が出来ません。

夏休みの時でした。

熊谷から手紙で貴女が急性腹膜炎の爲めに危篤だと云つて知らして來たのです。私はびつくりしてしまひました。その翌の日は友人と温泉に行く事になつたのでしたが、そんな事を考へる隙がなく、私は停車場へ駆けつけたのでした。

M 驛から俾で熊谷の家へついたのは、手紙を受け取つてから五時間とも

たつてゐませんでした。

熊谷はその時眼に涙を一杯ためて出て来ました。その時私はかういふ事を聞いたのです。

『梅子さんはもう死んでしまひました。そしてお葬式は昨日でした。』と。

自分は夢の様な気がしました。決してそんな筈が無かつたのです。然し私は熊谷の手紙が漸く三日目に届いた事に気がついたので。手紙が郵便局をぶらついてゐる間に貴女はもう此の世の人でなくなつてゐたのです。

私はお葬式にも連る事が出来なかつた事を本當に口悔しく思ひました。自分が冷淡であつた様に思つたまゝ死んでしまつたでは無いかと思ふと、取り返しのつかぬ事をした様に思はれてなりませんでした。然し私は貴女が尋常の運命の上にあるのでない事を知つてから深く貴女に同情し、そして幸福で育つ様に祈つてゐたのでした。がその心は勿論貴女には解らな

かつたに違ひありません。

私は熊谷の家の玄關でとうとう涙を流してしまひました。

私は兎に角貴女の靈前にお詫びをするつもりで熊谷に案内して貰つて出かけました。其の頃は丁度お盆だったので、街中に人が出てゐるし、おまけに盆踊りがそつちにもこつちにも、はやし立て、踊り廻つてゐるので、私の俤は仲々前へ進みませんでした。私は何故あの時俤に乗つて行つたづたのか、自分にも解りません。熊谷の家から貴女のお家迄二丁許りしかなかつたのですもの。私は貴女の事以外に何も考へる事が恐らく出来なかつた事とも思つたりしてゐます。

私がお家へ行つた時、お母さんは非常に喜んでくれました。お父さんも喜んで呉れました。が、お母さんの眼が涙でぬれてゐるのを見た時、私は苦しくなつて、何といつていゝか解らなくなつたのでした。

あの桐の箱の中へ入れられたかめ。それがお父さんに抱へられた時、そしてその後にお友達や親類の人がお送りした時の事を私は覚えてゐます。私は中途からお願して停車場迄の間、あなたを抱へて歩きました。泪ぐみながら。又祈りながら。

あゝ貴女はもう此の世の人では無いのです。あなたは世の汚れといふ事を知らずに死んでしまつたのです。美しい國から、美しい國へ。この地上の生活は短かつた事を私は惜しみます。いゝ性質が現はれずに死んでしまつた事を私は悔みます。

梅子さん。

どうぞ此の地上に育つてゐる、貴女のお友達、それからあらゆる子供等の上をお守り下さい。それから淋しい私も。

×月×日。

今日校長からかういふ訓示があつた。

「校舎が大分汚れてゐる。紙屑を散らす子供も殖えた。諸君は、どうして紙屑が散らされるか、又如何なるものを散らかすを調べて、注意して頂きたい。

それから落書も随分ある様に思ふ。教室を廻つて見て歩いて壁に書いてある所がある。諸君が多分氣附かれないで消さないでゐるだらうか、自分の教室にあるものは子供に消さして慾しい。恐らく前からの落書であらうと思ふ。それから卒業生が来て教室に落書きをしたり、悪戯をする者があるが、あゝいふ卒業生を作り出さぬ様注意して欲しい。少くも卒業生といふ者は、自分の學校を愛さなければならぬ筈だ。甚だ怪しからぬ事だ。」
この訓示の全體に就て自分は兎や角云はうとは思はない。然し自分に關

係のある部分だけは明瞭にして置く。

落書のある教室といふのは自分の教室もその一つだ。自分はそれをすつと前から知つてゐる。

一體何故直接にその名前を指して云はないのか。へんに皮肉る様に云ふ事は恐ろしく人の感情を害す。そして自分の斷案で兎や角決定して終ふ。

自分はへんに遠廻りに厚意のない皮肉を極端に嫌ふ。校長はそれを極めて教育的な上品な言葉と心得へてゐるらしい。

『この學校の先生は皆よく貴方方を世話して下さる先生だけで……』といふ様な先生は一人もない。』などと生徒を前に置いて云ふ邊り、實にたまらない下品さだ。何を云つてゐるのか一向譯が解らない。そんな誰にとつても好感情を持つ事の出来ぬ言葉を平氣で所嫌はず放つ。子供は何と思ふか。教師は何と感ずるか。その効果がどうかをよつく考へる必要のある事

だ。自分の知つてゐる或人が學校を參觀してゐて、丁度朝禮の時校長の訓示を聞く事が出来た事を喜んでその歸りにかう云つた。

『一體校長は何を云ふ積りであゝいふ皮肉の様に我々にさへ聞かせる事を云ふのだらうね。眞逆職員に訓示してゐるのでもあるまい。自分が後に居て見て居ると、否聞いてゐると、後の一生徒がくすぐつたい様な顔をして『ふん』と嘲笑つて側の者と話し合つてゐた。校長さんの訓示もあの位歓迎され、敬服されれば澤山だね。田舎から出て来た自分達の眼にはどうもいゝ感じは持てなかつた。それから休んでゐる時間に一人の生徒を捉へて、『校長さんが大層立派な方ですね。さぞ皆さんを大切にしてくださるでせうね。』と何氣なく聞いて見たんだ。所がその生徒が何と返事をしたと思ふ。『いゝえ非常な意地悪ですよ。大切にされる人はうんと大切にしてくださるでせう。』とや大ていの者は皆叱られる位の所です。先きの校長さんの方がどれだけ

好かつたかわかりません。」と云つて逃げて行つたんだ。自分は驚いた。自分の學校をあんなに云ふ子供にあんまり遇つた事が無い。本當に驚いたよ。何れどつちか、悪いんだらうね。東京といふ所も案外つまらぬ所だね。校長や職員と子供との關係が田舎の方が遙かにしんみりしてゐるよ。嘘を教へてゐる人なども無いでも無かつた様だ。まあ折角やり給へ。」

自分は露骨すぎる程露骨に云つた知人の話を聞いて少からず赤面した。

第三者にさへも簡単に校長が判る事を悲しくさへ思つた。

自分は常に皮肉な下品に聞える鼻持ちのならぬ、而かも内容が覗はれるあゝした種類の言葉を止めて貰ひたいと常に心の中で願つてゐた。然し自分の如きものは絶対の権力を持つて、職員等とは掛け離れた所にゐるといふ自信を持つて、自分等を傭人の様に心得てゐる校長に向つてとても云ひ得る所では無い。

自分が自分は相變らず不快さを時々刺戟された。前の訓示の時も、自分はかなり腹が立つた。何故あんなに、遙か下の者に向つて宣言でもする様な調子で、而かも誠意の無い云ひ方をするのか、腑に落ちない。暖く相談的にしんみりと出て来るなら、自分達とても誠意を持つて云ひ得る事が山程ある。少くとも教育者としての生活をしてゐる自分等は決して學校の事を眞に思ふ心が、校長に劣るものには無い。自分はもう少して次の言葉を傲然と云ふところだつた。

『先生はもう少し職員を信じ、職員の立場を失くして了ふ様な言葉を改められては如何です。成程自分達は先生の下に居る者です。然し誰でも何かの成案があつてやつてゐるものです。それを無暗に簡単に踏み荒す事を止めて頂きたいものです。』

子供の落書は私の教室にあります。私はそれを前から知つてゐます。武

者人形の頭を鋭筆で小さく書いたものです。

私は失禮ですがあれを無意味に眺めて居たのではありません。校長さんよりもう少し深く考へたかとも思ひます。『あの落書を消しなさい。落書は不可ません。』と云へば何時でもすぐに消す事が出来ず。然しあれを何かに利用する事が出来ぬものでせうか。

人に命じて許り頭から押しつけてやらうとする方には解らぬ事かも知れませんが、私はあれを却つて楽しみに残しておいたのです。子供があれをどうするかに注意してゐたのです。子供があれを如何に見、又如何に處分するかを興味を持つて見てゐるのです。自發的にあつた落書を揉み消して終ふ様になる事を私は望んでゐたのです。これは自分の生活から押して見て、過分な事かも知れませんが。然しそれを望んで悪いといふ事は決して無いと思ひます。あれが一學年中かゝつても知らぬ間に消えてゐないかも

知れません。が決してあれを廓大した様な落書は私は自信を持つてしないと断言します。子供があの落書を見て、刺戟されて又落書をすると思ひますか。それとも又、あの落書を見て、自分がやらうとする落書の悪い興味が抑へられると思ひますか。私に云はせれば恐らくどちらでもあると思ひます。若しあれがあつて他にあつた落書をする者が無かつたならば自分はかなり喜ぶでせう。子供の生活を思つて。又あれを消した者があつたら自分は涙を流して感謝するでせう。何せよ。私はあれ以外には決して落書をさせぬ事を自信を以て云ふ事が出来る積りです。『その壁に落書しては不可ませんよ。』とは私は一度も云ひません。そうした禁止命を私は忌むからです。が何かに依つて私は今迄もそれを防ぎとめてゐます。

一學年過ぎてあの教室を去つて、他の教室に移る時、私は或は恥ぢながらあの落書と別れるでせう。又或は自分の足らなさを悔い反省しながら、

後の人に迷惑をかけぬ様にあれを消してすごとく立ち去るでせう。
校長さんが落書に對して御心配なさるのは御尤もです。がもう少し他の者がはいり込む事が出来る餘裕を以て、誠意を持つて暖かに出られては如何です。それが恐らく如何なる場合に於ても効果の多い事と信じます。今迄も、或は現在でもその獨斷的な命令の前に立ちすくんで氣のりのしない信じられぬ仕事をしてゐる職員が決して少くない事を自分は知つてゐます。本當に機微な所です。尤もその人の生活の根本にふれる問題ではあるのですが。職員を信じ、又教育に誠意があれば出来る事です。皮肉は案外な所に突起を起す事があるのを御存じの事とせう。人を覆ひつくす暖かさはごれだけ人の誠を呼び起し得るかを御考へになつた事がありますか。
貴方は人を慥へさせて喜ぶ、妙に慘酷な性質のある事を只の一度でも御感じなされた事がありますか。

「生徒が不可ない時は、授業しなくてもいいから規律を正さしてからやれ」かういふ言葉を私は何遍もなく今日も聞いて覺えてゐるのです。成極全く教育に經驗のない、子供の心理を深く眺めた事が無い人が聞いたら尤もらしく聞える事とせう。然し私達の神経では合點が行かないのです。或女の先生が階子段に一時間一學級の女の生徒を不動の姿勢をとらしたまふ立たせたのは、先生の御考へがよく徹底した爲めだと思つてゐます。あゝいふ事つまり子供を慥えさせ、徴りらかすことが如何程いゝ効果があると御思ひなのですか。彼等は冷たい、正體の解らない神経に取り圍まれてぶる／＼震へてゐるだけです。成程一時は効果が直ぐに現はれる様に見えます。あれがどれ程眞の効果なのか。それから又どれ程永遠性を帯びてゐる事なのかをよく御考へになる必要があります。あれの結果は、嘘でも平氣で云ふ様になる事がお解りになりませんが。人間の冷たい心を出し抜けに突きつけら

れた子供の神経の痛い攪亂が如何なるものを當然の結果として喚び起すかは考へてもぞつとします。

私の淺薄な考へに依りますと、廣い暖かい心を持つて、掻き抱いてやりながら、しんみりと話してやる方が、どれだけ彼等から善いを引き出すか知れないと思ひます。人の心を呪はずに、幸福に自分の否を正して行く事、それがどんな喜びでせう。私は實際にそういふ取扱方をしてゐる友を知つてゐます。

兎に角何より大切な事は、貴方の慘酷な非人間的な性質を取り去る事です。それを取り去れば空虚になる様ですと困りますが、恐らくそんな筈はないと思ひます。すべてが或中心から起つて来る事です。私は時々自分の生活の貧しさを思ふて淋しくなります。然し先生はもう何もかも徹底し過ぎた様なへんな意固地な所があります。私は先生を完全な人だとは思ひま

せん。あらゆる人がそうであると同じに。私も反省します。先生も猛省する事を望んで止みません。校長に向つて一訓導が云つた事が反語にならないれば幸いです。出過ぎた所は許して下さる様お願いします。』
然し自分はこれを云ふ事が出来なかつた。校長が餘りに校長らしい顔をしてゐるからだ。そして又云はぬ方が却つてよかつたのだ。自分が又憤りに燃えそして自分を寂しく思ふ事が當然起らなければならなかつたからだ。それよりは温和しく自分を悉皆と抱いて冷い所へ自分の心を引き出される様にして置く方がすべてに向つてよかつたのだ。

自分はこの訓示の後もやつぱり落書は消させなかつた。

自分は校長が腕を組み、嘯きながら教室にはいつて来て、例の落書の前に立つてまだ消さずにゐる事を知り、自分の方に鋭い一瞥を興へて傲然と去つて行くのお見た時妙に闇い氣持になつてしまつた。

×月×日。

此間、學校で盜難騒ぎがひつきりなした。二三日前には生徒の辨當が二つ失くなつた。その翌の日も辨當と、それから職員の靴が失くなつた。そして今日、自分の級の子供の金が失くなつた。

自分は黙つて居やうかと思つた。

然し盜られた子供は可憐相でならなかつた。それも一人では無かつた。

三人が同時に盜られ、合計すれば一圓近い金だつた。

自分は自分として云へる程度で子供を検べて見た。——教室にはいつて

來た人、たとへ組の人であらうと、他の組の人であらうと。——

が何しろ休憩時中は教室にはいらぬ事になつてゐる規定なので、誰もそれを知つてゐる者は無かつた。それが又極めて當然な事なのだ。

金を持つて來た事を知つたら自分が預つて置いてやるのだつたが、と思

つたが追付く事では無い。いやな奇々とした、重くしい氣持ちになり乍らどうしやうかと考へた。

自分は兎に角校長に話した。そしてかう附け加へた。

『何しろ、私の責任ですから私が黙つて辨償してやる積りでございますが念の爲めと後の警戒の爲めに申し上げたのです。』

校長は云つた。

「そうですか。ごうも困りますね。あまり度々ですから。學校の外からでは無い様にも思ふが、内の者だとも思ひたくない。がごうも内の者らしい警戒しなければ不可ない事だ。第一机に入れて置くといふのは不用心極まるから着物の中にポケットでもこしらへて置いて入れて置く様にしたい。兎に角警戒させよう。が辨償する事は心掛けは美しいが不可ません。出來るだけ子供を検べて見て下さい。」

「私にはいい加減な憶測で子供を疑つて検べるといふ事が出来兼ねます。その子供が果してそうであつた場合はいいのですが、若しもそうで無かつた場合はたまりません。その子供を滅茶苦茶に踏み躪る事になります。私にはどうも巡査のやる様な事は出来ません。ですから辨償して、今後各々で氣を附ける様にしたいと思ひます。」

「いいや辨償は不可ません。今後悪い例を遺しますから。」
自分は兎に角下つた。そして色々考へた。内の子供の様な氣もする。がそんな事が無い氣する。辨償を盗る所を見ると、外から忍び込んで來てやる様にも思へる。そして辨償の殻を時々堀のあたりに發見する事があるといふのを、どう解釋すればいいのだ。内か外か？やつぱり解らない。何しろ辨償を盗つて食べなければならぬ氣持を考へると暗い氣持ちにならざるを得ない。悪戯に人の辨償を盗る者が無い。眞剣で自分の生命を保

護する爲めにやる事だ。成程行爲としては随分善くない。然し警官の立場から抜けてその動機を考へなければならぬ。

學校の中に、食に飢ゑてゐる子供が居るだらうか、有るとすれば學校では平氣でゐる譯には行かない事だ。何れだけその子供があらゆる點で悲しんでゐる事か。

若し又學校外の者とすれば。——餘程甘く姿を晦まし、小使の眼を盗んで十五分といふ休みを甘く利用して、極めて敏活にしなければならぬ。死物狂ひだ、「見つけられたら」といふ事を怖れながら、あらゆる危険を冒して食を求めぬ飢ゑたる者だ。そういふ者がある事も想像し度くない。

一體辨償箱を又學校の内部に置くといふ事を考へると、兎に角たしかに食物にだけ本當に要求のある者に相違ない。
それは誰なのだらう。解らなくなる。好奇心が一生懸命になつてそれを

小學教師の手記

突き止める事をすゝめる。然し見つからなければ幸だ。見つけた時の氣持を考へると、とても積極的の探す氣にはなれない。

多くの場合消極的にいく事を嫌ふ自分も、かうした事の前には積極的に出る勇氣がない。飽く迄もそれを眼を瞑つて防ぐ方法を講じたい。

然し探す様にといふ。探さぬといふ事は、如何にも誠意が無い様に思はれるかも知れない。が自分にはそんな他人の思わくを氣にしてゐる所ではない。

「貴方は教室にはいつて来た、又は教室に近く歩いてゐた誰かを見ませんでしたか。」

自分は或生徒に云つた時、自分で自分の底意のある云ひ方が憎らしくなつた程だつたのだ。

どうしたら明るい方面へ向け、勇氣を興へる事が出来るかといふ事なら

元氣になつて仕事が出来る。が反對の方面には自分はどうしても尻込みをしざるを得ない。

一般の家庭の状態が考へて見ると、兎に角或變調の中に在る事は確かだ。あまり都合がよく許り行かない様になつてゐるのだ。子供が習字の時、新聞紙を持つて來るのを見てもそれが解る。新聞紙に書く事を止めなさいとは自分は云へない。子供等とて何も好んで、新聞紙を持つて來たくないのだ。縦令親が云つたにしろ、子供はそれを嫌がるのが當然だ。が彼等にも親の心持ちが解るのだ。

辨當の時、自分はよく感じる。

好運な家庭の子供は可味しそうな物を持つて來て公然と食つてゐる。があまり都合のよくない家の子供は蓋で御飯を隠しながら、他を恐れる様にして食つてゐる。近い家の子供は歸つて食べて來る事が出来るので、餘計

な事を感じずにすむが、遠い子供はそうはいかない。たまにはパンを持つて来て食ふ子供もある。その子供等は可味そうに食べてゐるのを、時々盗む様にして見てゐる子供を見る時、自分は、へんな氣がして了ふ。事實に於ては、餘り可味くないパンも、一部の子供等から考へると、お錢を出して買つたといふだけ可味しそうに思はれるに違ひない。自分はさういふ可憐相な子供を見た時、自分の所へ来てゐるお茶を喫ませやうとするが、子供等は容易に喫まない。

どうも食事の時間は自分にとつて心持ちのいい時間では無い。色々な事を感じなければならぬからだ。其處にも此處にも盜難事件の背景がある。自分はどうかして子供等が平和に食事をして呉れる事を希つてゐる。お互可味しいものを持つて来た事をほこらず——尤もそんな事もないが——不味いものを持つて来た事を恥ぢずに平和にして食事をして呉れる事を心

から希ふのだ。その爲め自分は時々「無理に不味いものを持つて来る事も不要だが、無理に可味いものを持つて来る事はいけない事だ。そんなものでも貴方方のお母さんの優しい心の御馳走なのだ。」といふ。そして自分は自分の辨當がどうかすると、少しせいたくな物である事を内心恥ぢる。

自分はこの事を考へるとつひ思ひ出す事がある。それはこの事件には何等の交渉の無い事ではあるのだが。——

自分か小學校に通つて居る時、飢饉で役場からパンを貰つて食ふ子供等があつた。三四年生の頃だ。

自分はそのパンを食ひ度くてならなかつた。が自分にはどうしても呉れなかつた。そのパンは兵隊の食ふがりくした不味い種類のパンだつたが自分は食ひ度かつた。

自分はとうとう或子供と約束して、自分のお握りと、そのパンの一つを
を取り代へて食べる事にした。それは學校では出来ない事であつたので、
學校の歸りにやつた。時には無條件で貰つて食べたりもした。

自分はこの事を考へるといやになる。その子供はパンを役場から貰つて
食べる事を名譽には思つてゐなかつたのだ。それでゐて他の者に食べさせ
る事には或満足を感じても居たのだ。

今は幸か不幸かかういふ事が無い。恐らく食べさせやうとしても今の子
供は食べまい。

がどういふ方法かで、困つてゐる家庭の子供を救ふてやらなければなら
ない。暗い心を起させぬ様に、どうかしてやりたい。學校で、調査して學
校で炊いて食事をさせ様といふ事も持ち上つたが、あまりいい方法では無
いらしい。一つそりと家庭の方へどうかしてやるのが一番いい様に思ふ。

食に飢ゑて、若し色々な悪智恵を起す子供があれば、それは極力救済して
やらなければならぬ。少年少女の中に、世の中を呪ふ様な子供はどうか
して作り度くない。

貧しい子供等を力づけ、元氣を興へて、健全に成長させて行く事が出来
れば何よりだ。

人の物を盗むその氣持を憎まぬでもないが、先天的な盜癖でない限り
憐んでやり、人の心の暖い所を見せる事に依つて救つてやらなければな
らない。遭難したら、自分で自分の覺悟をするのが何よりだ。何で自分等
がその動機に對して責める事が出来るか、「渴しても盜泉の水を飲まぬ」は
正しい事に違ひない。がそれを飛び越したものは、決して一度や二度遂々
しての後で無いに違ひない事を我々は考へなければならぬ。その犯罪者
を探し出さぬ事は消極的でも、それを救済してやる事が積極的では無いか

自分はどうも盗難と學校の子供とを結びつけすぎて居る様だがこれは勿論單に學校の中で許り通用する事だとは思はない。

扱て自分の子供等の盗まれた金はどうするか。やつぱり自分は辨償するのがどう考へてもいい事に思ふ。

「一日か二日たつて出なければ私が辨償します。私の不注意ですから然し内密ですよ。が皆が家へ行つて、置き忘れても居ないかと檢べて見ておいでなさい。」子供を歸す時そう云つた。

×月×日。

……教育の邪道を行く者。

自分は某校長を考へるとさういふ氣がしてならない。

そして又「確かにさうなのだ。」と信じる。

何一つ彼は信念のある進み方をして居ない。虚無が全體だ。徹底した考

へは何一つ持つてゐない。一年の間にその閃きさへも自分は感じた事が無い。自分は自分の神経を疑つた事さへある。然し少し公平な、そして考へのある教員は誰でもそれを感じてゐる事を知つた時、自分は妙な淋しさを感じた。

闇の中を手探りながら行かなければならぬ子供等！自分がかうした校長の元を集つてゐる子供等を考へてふとさう思つた。確乎たる教育の信念を持つて、正道をどこ迄も踏みこたへて行く人がある事を懐ひ、そして彼を思つた時、自分は人間の種類にも随分多くの種類があり、同じ校長にも多様な事々今更感じさせられる。

「いやあの人も考へが有るんだ。」といふ人の話を聞けばかういふ。

「あの方は自分を如何すれば偉く見せる事が出来るか。名校長と見せる事が出来るか。それから又上の方の教育關係者を如何にすれば甘く誤魔化す

事が出来るか。職員を如何にして壓伏して、他から見ても如何にも校長を敬つてゐる様に見せやうかといふ考へがあるんだ。一體あの人に教育上の意見とか、信念とか有ると思ふのは大きな間違ひさ。何所を突いたつて、そんな音がする心配が無いんだ。某雑誌を見ても分るでは無いか。渡米視察報告を多くの校長が書いてある中で、一番拙い、つまらないものを書いてゐるのはあの人は無いか。この間も偶然あの雑誌を前において四五人で話し合つたんだ。が誰でもそのつまらなさを感じてゐるんでね。あれで渡米出来るなら猫も杓子も出来るね。があの人は又あの人らしいやり方で選ばれた様な譯なんだ。自分が金を出してもいゝからやつて呉れと云つたんだそうだ。或當局の人なんか憤慨して居たのだが、兎に角曲りなりにも行く事になつたんだ。誰もあの校長からお土産を期待しては居なかつたのだから繪ハガキ位の所でまあそんなものだらうと思つてゐるのだよ。此

の間もあの學校の父兄からかういふ事を聞いた。「私共が始め幾らかづゝでも金を出して後援したのですが、もう少しは何か立派なお土産があるだろうと思つてゐました。實は出したくは無かつたんですが、他の人達が出す時自分の方で出さないと、如何にも金でも惜んで出さない様に思はれていやなので兎に角出したんですよ。そうした人達に聞いて見れば他にも幾らもあつたんですね。あそこからなあんだと思ひましたよ。歸つて來てからの始末なので益々がっかりしますよ。或一部の者だけ歸つて來てから〇〇軒へ招待したので憤慨してゐる人もありますよ。」幾ら僅かであつても、精神に於ては變りが無い筈だつたが金の残りで一部の人々に振舞ふとは怪しかんと云つてね。」そう云はれても何とも云ひ様の無い事なんですよ。」と云つたよ。

兎に角アメリカあたり迄行つて來たら何か新しい意見でも少し位は持ち

小學教師の手記

施設して、少しは父兄の方にも職員の方にも満足を與へるだらうと思つて
わた人達は、随分當がはづれてゐるだらうね。然しあれが正味だ。
君達は知らないだらうが、あんな不評判な校長が、どうして命を繋いで
ゐるのかには理由があるんだ。それは某有力家の袖の下に隠れてゐるから
さ。只それだけだ。がその人も今ではかなり愛想をつかしてゐるらしいが
それでも兎に角表面は何とかうまく行つてゐる形なのだらうね。何しろ妙
な教育社會さ。

意見とかそんなものが一向無くて助つて行けるから有難い事だね。唯
繋りは第三者をうまく誤魔化すか如何かの問題なのだ。あの學校で折角父
兄から金を出しあつて拵へてやつた〇〇器具も實は、父兄が出し抜かれた
んだ。父兄の或人等はさういつて憤慨してゐる。今後、何かの寄附を仰が
うたつて、うまくは行かないから見て居給へ。もう正體が第三者の眼にも

映つて来たのだからね。あの校長も今は退き時なんだが。あんまりまづく
ない中にね。あゝいふ人は或意味から云へば人の子を毒する者なのだから
ね。純粹のエゴイストだ。』

何といふ事だらう。只有力者の袖にすがつて生きて行くといふ事は恥知
らすの蛆虫だ。全く人の子を毒する者といはれても仕方があるまい。

彼が若し靜かに自分を考へる事が出来るほんの一瞬間でも有つたら、恐
ろしい冒瀆を感じる事が無いであらうか。許された道で無い所を踏み躪つ
てゐる自分を發見しないであらうか。だがそれも恐らくは無い事だらう。
そんな瞬間を少しでも持つ人の生活はどうかにかにそれが感じられる。然し彼
には全然それが無い。惡魔は常に凱歌をあげ乍ら彼の中を飛で歩いてゐる
そして人に呪を起させる或物を絶えず發散してゐる。

彼にとつては職員は一の傭人に過ぎない。尙ほ適切に云へば奴隸に過ぎ